

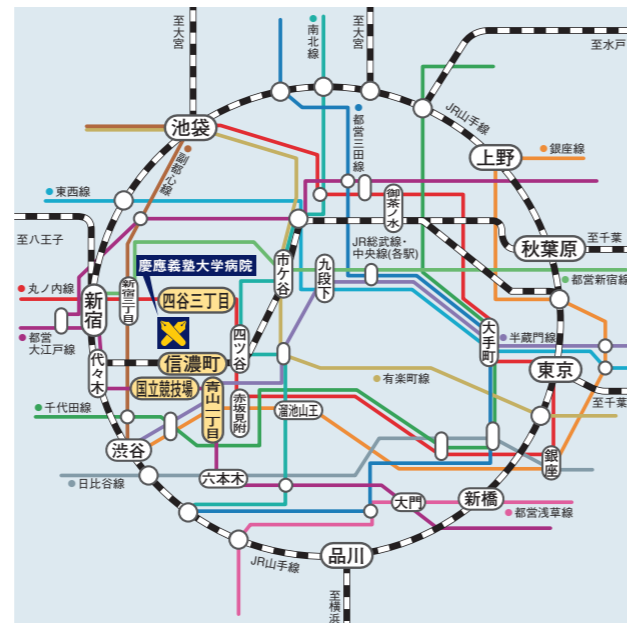


### 交通アクセス

#### 周辺地図



#### 路線図



#### ■公共交通機関で来院される方

##### 【JR・地下鉄】

- 中央・総武線「信濃町」駅下車  
徒歩約1分
- 都営大江戸線「国立競技場」駅下車（A1番出口）  
徒歩約5分
- 丸ノ内線「四谷三丁目」駅下車（1番出口）  
徒歩約15分
- 半蔵門線・銀座線「青山一丁目」駅下車（0番出口）  
徒歩約15分

##### 【バス】

- 新宿駅西口－品川駅高輪口（品97）「信濃町駅前（慶應病院前）」下車
- 早大正門－渋谷駅東口（早81）「四谷第六小学校入口」下車

#### ■お車で来院される方

- 駐車スペース（有料）は台数に限りがありますので、満車の場合は入場できません。診察・検査等の予約時間にあわせ、電車・地下鉄・バスなどの公共交通機関をご利用ください。

※雨天時や休診日前後は特に混雑いたしますので、ご注意ください。

### お問い合わせ

#### ■外来予約窓口

（初診のご予約／予約の確認・変更／検査予約の変更）

##### ●初診のご予約

**03-3353-1257**（午前8時30分～午後4時00分）

※ご予約には紹介状が必要です。

※紹介状をお持ちでない場合、初診に係る特別料金（選定療養）として、7,700円（税込）をご負担いただきます。詳細は外来予約窓口でご確認ください。

##### ●予約の確認・変更（歯科・口腔外科／検査を除く）

**03-3353-1205**（午前8時30分～午後4時00分）

##### ●歯科・口腔外科の予約変更

**03-3353-1211**

歯科・口腔外科受付（午前8時30分～午後4時00分）

##### ●検査予約の変更（CT、MRI、超音波、心電図等）

**03-3353-1205**（午前8時30分～午後4時00分）

**03-5363-3654**（午後4時00分～午後5時00分）

#### ■医療連携推進部 病床管理担当（入院・退院について）

**03-5363-3855**（午前8時30分～午後5時00分）

#### ■会計窓口（診療費のお支払について）

**03-5363-3861**（午前10時30分～午後5時00分）

#### ■患者総合相談部 総合相談窓口

**03-5363-3638**（午前8時40分～午後4時30分）

#### ■セカンドオピニオン外来事務局

**03-3353-1139**（午前8時30分～午後4時30分）

#### ■文書受付窓口（診断書・証明書作成・公費関連書類について）

**03-5363-3531**（午前8時30分～午後5時00分）

#### ■がん相談支援センター

**03-5363-3285**（平日午前9時00分～午後5時00分）

#### ■予防医療センター（人間ドックについて）

**03-6910-3533**（午前8時30分～午後5時00分）

#### ■その他のお問い合わせ（代表）

**03-3353-1211**

### 受付時間・休診日

#### ■外来受付時間

午前8時40分～午前11時00分

#### ■休診日

日曜日、第1・3土曜日 / 国民の祝日、休日 /  
年末年始（12月30日～1月4日） / 慶應義塾の休日（1月10日）



# 慶應義塾大学病院

〒160-8582 東京都新宿区信濃町35番地 03-3353-1211（代表）

慶應義塾大学病院Webサイト

<http://www.hosp.keio.ac.jp/>







## 慶應義塾大学病院の理念

患者さんに優しく患者さんに信頼される

患者さん中心の医療を行います

先進的医療を開発し質の高い安全な医療を提供します

豊かな人間性と深い知性を有する医療人を育成します

人権を尊重した医学と医療を通して人類の福祉に貢献します

## 慶應義塾大学病院の理念 実施方針

- |              |                                    |
|--------------|------------------------------------|
| 1. 患者さんの立場で  | 私たちは、患者さんの立場になって考え、ともに疾病の克服に努めます。  |
| 2. 質の高い安全な医療 | 私たちは、質の高い安全な医療を持続できるよう努めます。        |
| 3. 不断の自己点検   | 私たちは、不断の自己点検と評価によって、病院機能の改善に努めます。  |
| 4. 独立自尊の医療人  | 私たちは、独立した一個人として責任をもって社会的使命を果たします。  |
| 5. 総合的なチーム医療 | 私たちは、各職種が一体となった総合的なチーム医療を展開します。    |
| 6. 新しい医療     | 私たちは、基礎と臨床が一体となって、積極的に新しい医療に挑戦します。 |
| 7. 倫理と人権     | 私たちは、高い倫理性を持って、人権を尊重した医療を推進します。    |

### 患者さんの権利

人として尊重されプライバシーが保護された医療を受けることができます

安全で安心な最善の医療を受けることができます

ご自身の医療に関して納得できるまで説明を受けることができます

ご自身の意思で医療を選択することができます

ご自身の医療に関して意見や希望を述べるすることができます

### 患者さんの義務

医療に関して正確に情報提供してください

医療に関する説明に納得できない場合はその旨を伝えてください

法令や院内の規則を遵守し他の患者さんや職員への迷惑行為を厳に慎んでください

研究や教育機能を持つ大学病院の役割を理解してください

受けた医療に対して当院が請求する医療費は滞滞なくお支払いください

## ご挨拶

### — 初の100年に向けて慶應義塾大学病院は新しく生まれ変わります —

1920年に開院した当院は、2020年に開院100年を迎えました。2018年5月には、新病院棟1号館が本格稼働し、2号館の改修工事も着々と進んでいます。新しい病院棟には、診療科の垣根を超えてチーム医療を実践することができる病棟および外来を配置しました。全国でも数少ない25を超える手術室の設置、救急センターから集中治療センターや手術・血管造影センター、産科病棟への直通エレベーターによる緊急搬送ルートの確保など、患者さんに安心・安全で最適な医療が提供できるようさまざまな工夫をいたしました。今後も、エントランス棟の新築や駐車場整備工事を行い、次の100年に向けて生まれ変わった新しい慶應義塾大学病院が完成する予定です。我々病院教職員にとって、最高の環境で患者さんに最適な医療を提供できることは何よりの喜びです。

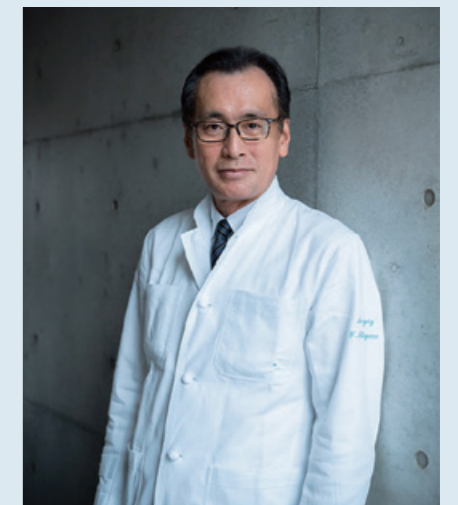
さて、病院開設100周年を祝い記念すべき2020年に、期せずして新型コロナウイルス感染症との闘いという、病院開設以来最大の危機に直面いたしました。しかし、教職員一丸となってこれを乗り越え、新しい時代の医療のあり方を懸命に模索しています。現時点で、開催は2021年に延期となりましたが東京オリンピック・パラリンピックの舞台となる新しい国立競技場、それを取り囲む神宮外苑の森、絵画館、神宮球場、新宿御苑など緑豊かな都心に位置し、交通の便にも恵まれた環境で当院は皆様に最高の医療を提供してまいります。

2万坪を超える広大な信濃町キャンパス内にある大学病院は、31の診療科と30の診療施設部門等に、研修医を含めると約900名の臨床系医師が各専門分野に配属され、一日平均の外来患者数は約3,000人、一日の入院患者数も約800人を数えます。さらに、年間16,000人以上の救急患者を受け入れ、手術件数も年間16,000件に及んでいます。また、特定機能病院として先進的な医療を提供するとともに、全国99の関連病院等との人事交流や医療連携を通して地域医療にも貢献しています。

2016年には臨床研究中核病院に、2018年にはがんゲノム医療中核拠点病院に認定され、また、2018年には内閣府戦略的イノベーション創造プログラムのAIホスピタルモデル病院に選定されました。さまざまな企業と連携し、AI技術を活用した医療の効率化、自動化を目指し、安全を第一とした患者さんへのサービス向上に取り組みながらウイズ、ポストコロナ時代の医療の最適化を図ってまいります。これまで通り、世界の医療の発展に貢献する責務を自覚し、さまざまな分野の新しい医療技術、医薬品、医療機器の開発において先導的な役割を果たすべく努めてまいります。

当院は、開院以来、慶應義塾創立者福澤諭吉の「独立自尊」、「実学」の精神にもとづき、初代医学部長・病院長 北里柴三郎が医学部開設時に説いた「基礎・臨床一体型の医学・医療の実現」「学力は融合して一家族の如く、全員拳って努力する」ことを実践してまいりました。信濃町キャンパスを舞台に病院、医学部、看護医療学部、薬学部の教職員が一丸となって未来の医学を切り拓き、新しい最良な医療を皆様に提供してまいります。

慶應義塾大学病院 病院長 北川 雄光



撮影者：稲垣純也

## 目次

理念／ご挨拶	1
<病院としての取り組み> 2019年から2020年の主な取り組みと出来事／ご寄付	3
<研究> 基礎・臨床一体型の研究推進体制	7
病院の先進的な取り組み	9
革新的医療技術創出拠点・臨床研究中核病院としての取り組み	10
<教育> 基礎・臨床一体型の教育	11
沿革	13
組織	15
役割と機能	17
資料	19
構内図	23
患者さんご紹介方法／初診受診ご予約方法／人間ドックのご案内	25



# 2019年から2020年の主な取り組みと出来事

## 1 病院開院100年

2020年に慶應義塾大学病院は100年を迎えました。当院は、北里柴三郎を初代病院長として1920年に開院しました。開院当初は外来のほかに7病棟と隔離病棟を有し、500人を収容できる病院としてスタートしました。開院から100年を経た現在では、946床の病床を有し、1日3,000人を超える外来患者さんを受け入れる病院となりました。北里柴三郎の言葉である「基礎・臨床一体型医学・医療の実現」を医学部・病院の理念として継承し、大学病院、特定機能病院として、世界を先導できる医療人の育成とともに、高度で先進的な医療を提供する役割と責務を担っています。

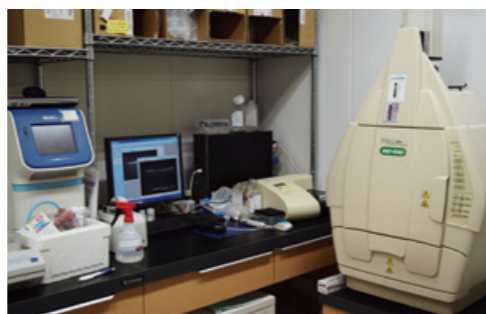
当院では、1994年の特定機能病院の認定に続いて、2016年には臨床研究中核病院、2018年にはがんゲノム医療中核拠点病院に認定されました。免疫難病に対する先進的医療、がん集学的治療、移植や各分野における高難度手術、内視鏡手術や血管内治療などの低侵襲治療に加えて、がんゲノム医療にも力を入れて取り組んでいます。同じく2018年には、内閣府のAIホスピタルモデル病院に選定され、さまざまな企業と連携してAI技術を活用した医療の効率化・自動化を目指して、患者さんへのサービス向上に努めています。また、2017年には、公益財団法人日本医療機能評価機構による「病院機能評価(3rdG: Ver.1.1・一般病院2)」の認定を取得し、医療連携関連や医療感染制御体制と情報収集・分析、臨床検査関連、職員の能力開発などが高く評価されました。

開院100年を迎えた2020年は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、未知のウイルスとの闘いによるさまざまな困難に直面する年となりました。当院では、複数診療科によるCOVID-19救命チームをすぐに立ち上げ、重傷の患者さんの救命、中等症の患者さんの重症化防止に努めました。並行して、大学病院内でPCR検査を迅速に行う体制を整え、検査結果を活用した安全な診療体制の整備を行ってきました。また、患者さんとそのご家族、最前線で働く医療者へのメンタル・ケアを行う、こころのケアチームや、基礎研究者が、疫学調査やウイルス遺伝解析によりCOVID-19研究を多角的に推進する慶應ドネルプロジェクトが発足しました。100年続く北里柴三郎の精神により、まさに基礎・臨床が一体化したオール慶應体制で、新型コロナウイルス感染症に挑み、どのような状況下でも高度で先進的な医療を安全に提供し続ける責務を再確認して取り組みました。不屈の精神により得た数々の経験を財産として、次の100年にむけてさらに精進してまいります。

## 2 救命チーム、ドネルプロジェクト

2020年4月、慶應義塾大学病院は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大に対し、中等症の患者さんの重症化を防ぎ、重症・重篤化した患者さんを一人でも多く救うため、複数診療科によるCOVID-19救命チームを結成し、医療体制を整えました。院内のゾーニングを行い治療する病棟や担当する医療従事者を分け、新宿区医師会・病院連携モデル、東京都の要請に応じて、患者さんの受け入れ、治療を行っています。

また、基礎研究部門では、COVID-19研究チーム(慶應ドネルプロジェクト)を結成しました。これは、初代医学部長・病院長である北里柴三郎の原点を再確認し、感染・免疫・炎症に関する研究を加速し、人材を育成する目的で作られました。「ドネル」という名前は北里柴三郎の愛称に由来するものです。慶應ドネルプロジェクトでは、150名を超える構成員によって、ウイルス遺伝子の解析による詳細な疫学調査、病態の解明、新しい血清診断法や抗体療法の開発にむけて研究を進めています。引き続き、感染制御に役立つたくさんの研究成果を国内外に発信していきます。



## 3 PCR、臨床検査科

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的流行に対し、慶應義塾大学病院ではPCR検査を中心とした検査体制を急ピッチで構築しました。全世界的に検査機器、検査試薬が不足する状況にありましたが、2020年2月27日にはリアルタイムPCR法による院内検査の運用を開始しました。また3月25日からは全自動遺伝子検査装置によるPCR検査の運用を開始し、1日100検体を超える検査が可能な体制を整えています。

慶應義塾大学病院はがんゲノム中核拠点病院として、免疫療法や抗がん剤、高難度手術などの患者さんにも安心して入院や手術を受けていただく必要があるため、4月6日からは全国の医療機関に先駆けて、術前や入院前の患者さんに対するPCR検査を用いた全例スクリーニングを開始しました。PCR検査の検体採取を行う専用ブースを院内に設置し、全ての診療科、看護部、医事統括室、感染制御部、臨床検査科が部門の垣根を超え一体となって運用しています。

この他にも、医学部基礎部門の協力のもと医学部施設を臨時に衛生検査所として登録し、PCR検査に関する臨床検査科の負担軽減やバックアップ体制を構築しました。また、臨床検査科の中でも複数の部門からなる混成の新型コロナウイルスPCR検査チームを結成し、検査についても微生物検査部門でのPCR検査だけでなく化学免疫検査部門での血清抗体検査の実施など、まさに社中協力の教えを生かし、病院・医学部が一丸となってCOVID-19と戦うための、もっとも重要な鍵である「検査体制」を支えています。さらに、こうした検査体制が構築できた裏には、義塾を想う多くの篤志家の方々のご寄付が活かされています。

これからも臨床検査科は、さまざまなPCR検査を中心に検査体制の充実をすすめ、コロナ禍においても、100年の伝統ある慶應義塾大学病院の誇る安全、安心な医療を提供し続けます。



チームコロナPCR



PCR検査装置「BDMAX」の操作風景

## 4 遠隔診療開始

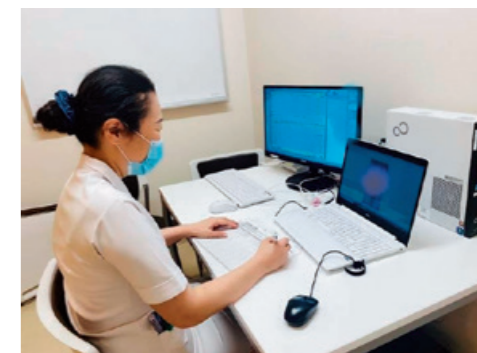
慶應義塾大学病院では、内閣府AIホスピタル事業の研究課題の一つとして、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、遠隔診療を含めた医療ITサービスを重点的に導入しています。なかでも、データのやり取りが可能な遠隔診療システムは先進的な取り組みです。

まず2020年4月より、精神・神経科と臨床遺伝学センターの外来診察においてビデオ通話を用いた遠隔診察を開始し、5月以降は11診療科で行っています。

また、6月より、産科外来では、クラウドサービスとビデオ診療システムを活用した遠隔妊婦検診を導入しました。本サービスでは、在宅での血圧や体重のデータをクラウドにアップロードし、遠隔診察時に活用することが可能です。これにより対面での診療に劣らないクオリティの診察を提供できるようになりました。

8月からは、産後2~4週の産褥期の産後うつスクリーニングを目的として、助産師による面談をビデオ通話にて開始しました。出産後や子育て中のお母さんの産後うつや育児放棄については社会的にも関心が高まっており、今後、これらの社会課題に、より深く取り組んでまいります。また、退院後数週間目の時期は、母子ともに感染症などに対して抵抗力の少ない時期でもあり外出は困難ですが、遠隔助産師面談を受けることで、母子ともに安全に面談を受けることが可能になりました。

さらに10月からは、セカンドオピニオン外来においてもビデオ通話システムを用いた遠隔診療を開始しました。セカンドオピニオンのために遠隔地から来院される患者さんは、多大な恩恵を受けることが期待されます。今後も、大学病院ならではの遠隔診療の活用方法を検討しながら、患者さんへのサービス向上に努めます。



遠隔助産師面談の様子



## 5 LINEを使用した 待合呼び出しサービスの開始

外来診察前の待ち時間をより有効に過ごしていただけるよう、2020年6月から、コミュニケーションアプリ「LINE」を使用した外来の待合呼び出しサービスを開始しました。

このサービスは、事前に「慶應義塾大学病院」のLINE公式アカウントを友だちに追加して必要事項を登録することで、自動再来受付機にて来院の受付をすると予約内容をご案内する「本日の診察のお知らせ」の通知が、外来にて到着受付をすると診察が近づいていることをご案内する「診察が近づいております」の通知が届く、という仕組みです。

外来待合付近が混雑している際などにおいてこのサービスを利用することで、ラウンジなどの混雑していないスペースで待つことができ、感染拡大を防ぐため密集・密接の回避対策としても有効です。10月時点現在、約11,000名の幅広い年齢層の方々が登録しています。

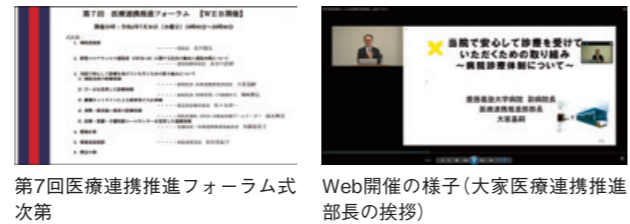


友だち追加画面

診察が近づくと届く通知

## 6 医療連携推進フォーラムWeb開催

医療連携強化に向けた情報交換や交流を行うため、近隣の医師会や、各医療圏に所在する連携契約締結医療機関、産業医、関連医療機関、ならびに看護や介護に係る施設等をお招きし、2018年8月より「医療連携推進フォーラム」を定期的に開催しています。2020年7月30日には、第7回「医療連携推進フォーラム」を、初の試みとなるWebにて開催しました。講演会では当院の医師より、流行している新型コロナウイルス感染症についての話を中心に、「新型コロナウイルス感染症に関する社会の動向と感染対策」や、当院で引き続き安心して診療を受けていただくため、安心してご紹介をいただけるための取り組みとして、「病院全体の診療体制」「発熱・肺炎疑い患者の診療体制」を紹介しました。ほかにも、さまざまな形で医療連携を推進するツールとして、「IT・AIを活用した診療体制」「慶應ホットライン」「医療・看護・介護コールセンターを活用した連携体制」についても紹介が行われました。多数の医療機関や、普段は参加が難しい遠方の医療機関にもご参加いただき、講演会内容について、またWebでのフォーラム開催についても、参加者の方々から強い関心が寄せられ、ご満足いただけたとの声も多数いただきました。今後も積極的に医療連携を推進していきます。



第7回医療連携推進フォーラム式次第

Web開催の様子(大家医療連携推進部長の挨拶)

## 7 新病院棟を中核とした事業計画

### ■ 慶應医学のさらなる発展を目指して

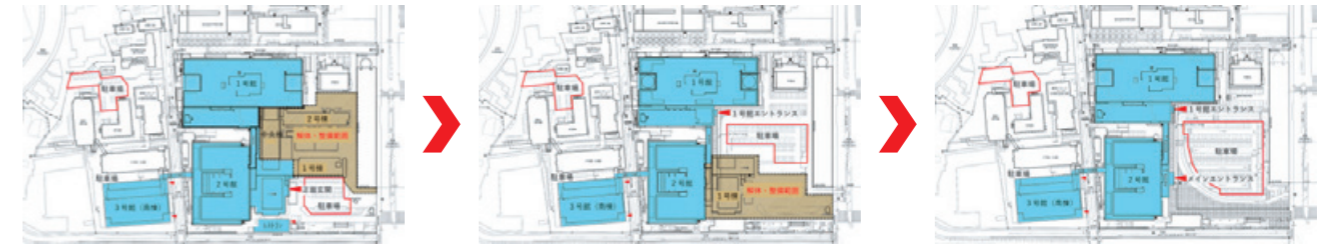
慶應医学は、慶應義塾の創立者である福澤諭吉の「実学」や「独立自尊」の精神を重んじ、初代医学部長である北里柴三郎が説いた「基礎・臨床一体型医学・医療の実現」「学内は一家の如し」を理念として、世界に冠たる大学病院の構築を目指してきました。

今後も慶應義塾大学病院は、患者さんにご満足いただける、患者さん中心の医療を提供します。そして、日本の医療を先導し、世界の病める人々の救済に貢献するために、新病院棟を中核とした右の4つの事業計画を推進し、病院スタッフ一丸となって取り組んでいきます。

- I 全ての医療チームが結集し、国民の健康増進と疾患制圧に貢献するクラスター診療の実現
- II 世界最先端の基礎・臨床一体型医学の展開による国際医療拠点の創設
- III 災害に強い都市型地域医療の推進
- IV 医看業の連携による世界を先導する医療人の育成

### ■ 工事計画

2018年5月に1号館がオープンしましたが、今後も引き続き、1号館、2号館の整備工事、1号棟、2号棟、中央棟などの解体工事、エントランス棟の新築工事、駐車場の整備工事が行われます。病院機能のさらなる充実に向けて、施設整備を進めていきます。



2020年10月  
■ 2号棟などの解体工事がはじまります  
■ エントランス棟の新築工事がはじまります

2021年7月  
■ 1号棟の解体工事がはじまります  
■ 引き続きエントランス棟の工事をを行います

2022年春  
■ 新病院棟をはじめとする施設整備工事が完了します

## ご寄付について

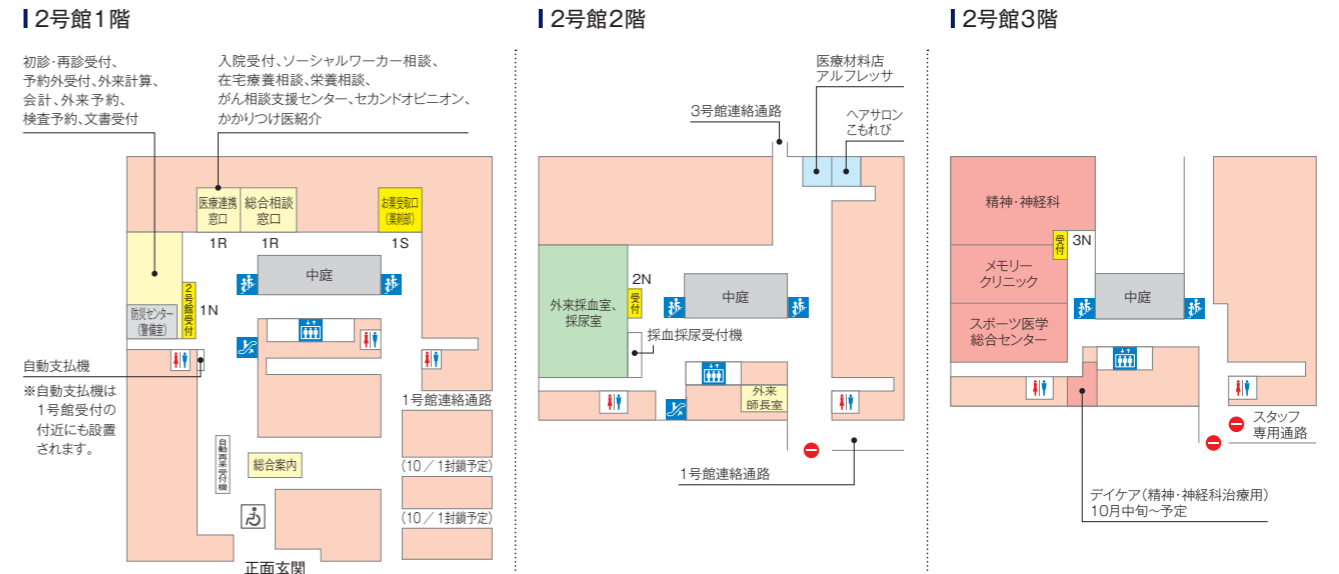
慶應義塾大学病院では、当院内外の皆様のご芳志を、診療、医学教育、医学研究の発展のために活用させていただいております。新型コロナウイルス感染症拡大の状況下では、皆様からのご厚志を速やかに学生や医療現場へお届けできるように、医療支援への寄付の申込みページを開設し、多くの皆様からご寄付や、医療物資のご支援をいただいております。

当院に対するご寄付は、税制上の寄付金控除を受けることができます。また、ご寄付に際しましては、信濃町の医療や教育研究の機能を拡充・維持するためのご支援、医学研究の発展に対するご支援、医学生の育成へのご支援等、具体的な用途をご指定いただくことができます。ご支援をお考えの方は、担当窓口までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

担当窓口	対応部門	連絡先
1 信濃町キャンパス整備資金	秘書課 (信濃町キャンパス)	03-5363-3430(平日:午前9時00分~午後4時30分)
2 病院備品指定寄付金		
3 慶應義塾全体に対するご支援	基金室 (三田キャンパス)	03-5427-1717(平日:午前9時00分~午後5時00分) kikin-box@adst.keio.ac.jp https://kikin.keio.ac.jp/
4 寄付金全般、寄付金控除に関するご相談		
5 慶應義塾大学病院医療支援資金	基金室 (三田キャンパス)	03-5427-1717(平日:午前9時00分~午後5時00分) kikin-box@adst.keio.ac.jp https://kikin.keio.ac.jp/news/support-covid19/

## 8 受付移転

2020年9月23日(水)、受付や会計などの窓口、お薬受取口、外来の一部やテナントなど、多くの機能が2号館に移転しました。



(変更があった場合には、病院のウェブサイトなどで随時お知らせいたします。)

# 基礎・臨床一体型の研究推進体制

－ アカデミア発 新規医療技術をいち早く医療現場・社会へ －

慶應義塾大学は、医学・看護医療学、薬学、理工学、環境情報学など、生命医科学・医療の分野に直接関わる多彩な学部・大学院や先端生命科学研究所やウェルビーイングリサーチセンターなどの研究所を擁し、密接に連携・協働することを通して、総合的に研究を推進しています。慶應義塾大学病院は、2014年8月に臨床研究推進センター、さらに2019年8月に臨床研究監理センターを設置し、医学部・病院開設当初からの「基礎・臨床一体型医学・医療の実現」の基本理念の下、基礎研究から臨床研究・治験、さらに実用化までの各研究開発プロセスを一貫して支援する体制を整備しました。革新的医療技術創出拠点として、国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) から橋渡し研究戦略的推進プログラムの採択を受けるとともに、日本発の革新的な医薬品・医療機器・医療技術の開発に必要な質の高い臨床研究や治験を推進する、国際水準の臨床研究や医師主導治験の中心的役割を担う病院として、医療法に基づく臨床研究中核病院の認定も受けています。

## 臨床研究実施方針

慶應義塾大学病院は、未来のよりよい医療のため、次の方針に基づく臨床研究を行います。

- 1. 被験者の保護** 被験者の身体の安全、プライバシーの保護、人権の尊重を第一とし、インフォームド・コンセントは丁寧な説明による十分な理解に基づいて受けます。
- 2. 法令の遵守** 法令、倫理指針等を遵守し、社会の一員として求められる責任を果たします。
- 3. 公正な研究活動** 気品の泉源、智徳の模範たる組織として、不正を容認せず、倫理と科学の両面で信頼される研究成果を追求します。
- 4. 人材の育成** 未来の医療を拓く質の高い研究者、医療人を育成します。
- 5. 社会への還元** 未来社会の発展のため、他施設への支援や相互協力を行い、研究成果の実用化を促進します。

## 先進医療・治験・臨床研究

臨床研究は、患者さんなどにご協力頂き、病気の原因の解明、予防・診断・治療の改善、傷病からの回復及び生活の質の向上などのために行う医学研究です。このうち、先進医療は国内未承認・保険適用外の医薬品・医療機器について、保険収載の可否のデータを収集することなどを目的とし、また、治験は新しい医薬品・医療機器など製品候補の薬事申請に必要なデータ(有効性や安全性等)を収集することを目的としています。先進医療の詳細については18ページをご覧ください。

### 治験審査委員会で承認された新規治験契約件数

区分	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
医薬品	35	40	49	43	44
企業治験					
医療機器	3	6	3	2	2
再生医療等製品	-	-	-	-	2
医師主導治験					
医薬品	4	3	5	3	7
医療機器	0	1	0	0	1
計	42	50	57	48	56

※当該年度に承認された新規治験契約数を年度ごとに集計

### 当院で許可した臨床研究法下の新規研究課題件数

特定臨床研究	2018年度:9件	2019年度:38件
--------	-----------	------------

### 医学部倫理委員会で承認された新規研究課題件数

区分	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
臨床研究	385	399	330	368	340
その他(医療計画、疫学研究 他)	28	11	10	17	4
計	413	410	340	385	344

※当該年度に承認された新規申請課題を年度ごとに集計(前年度申請分を含む)

## 患者申出療養

患者申出療養は、患者さんの申出を起点に、国内未承認薬などを使用した先進的な医療を、安全性・有効性等を確認するなどの一定のルールにより保険診療との併用を認める、保険外併用療養費制度の中に位置づけられた制度です。将来の保険適用を目指し、国の指定を受けた病院(臨床研究中核病院)が臨床研究として計画し、病院および国の会議で十分に審議された上で実施されます。ご参考:慶應義塾大学病院で実施中の患者申出療養 ▶ <http://www.hosp.keio.ac.jp/about/yakuwari/moushide/>

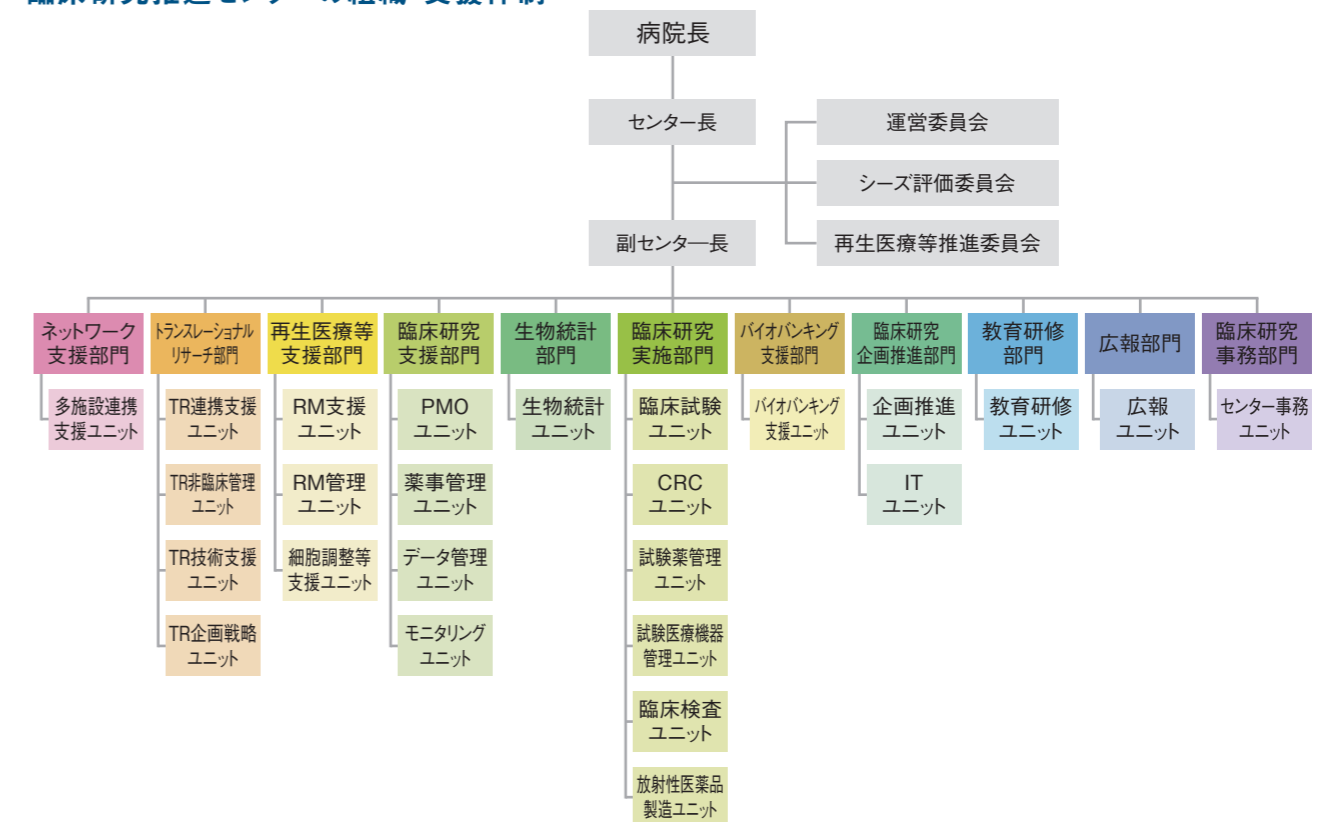
患者申出療養制度(厚生労働省Webサイト) ▶ <https://www.mhlw.go.jp/moushideryouyou/>

## 臨床研究推進センター

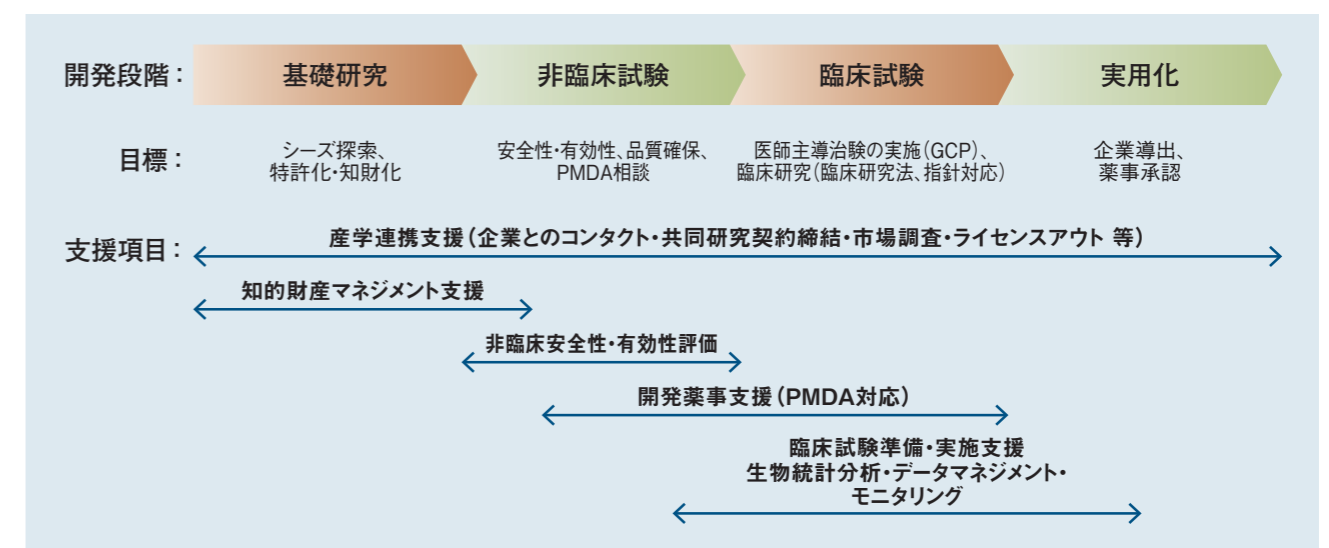
臨床研究推進センターは、ミッションとして「社会のニーズに応じた最適な医療が提供できるよう、より優れた医療技術を常に探求し、人類の健康増進に寄与する」を掲げ、研究室から生まれる基礎研究の成果を安全で有効な医療手段として患者さんにお届けするため、研究開発の各段階に必要な各種業務のエキスパートによる支援を行っています。また、センター運営委員会やシーズ評価委員会を設け、切れ目ない研究開発支援を可能とする体制としています。

臨床研究推進センターの詳細はWebサイトをご覧ください。▶ <https://www.ctr.hosp.keio.ac.jp/>

### 臨床研究推進センターの組織・支援体制



### シーズの開発段階に応じた支援業務





## 臨床研究監理センター

臨床研究監理センターは、慶應義塾大学病院の理念および臨床研究実施方針に基づく臨床研究や治験の適正な実施のため、2019年8月に新たに設置された組織です。

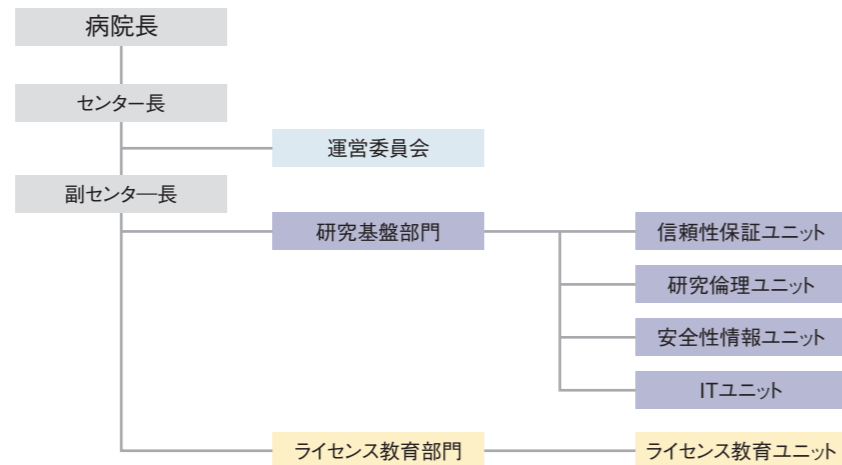
法令や倫理指針等により病院長の責務として定められた事項を補佐することを目的に、以下の業務を行っています。

1. 臨床研究に係る倫理等の教育研修計画の策定および教育・研修の実施
2. 臨床研究の信頼性保証に係る監査等の実施
3. 臨床研究に係る有害事象・疾病等の安全性情報への対応
4. 臨床研究に係る法令および倫理指針等への適合に必要な業務
5. その他、病院長の指示する業務

臨床研究監理センターの詳細は、同センターWebサイトをご覧ください。

▶ <https://www.crea.hosp.keio.ac.jp/>

### 臨床研究監理センターの組織・支援体制



## 病院の先進的な取り組み

### ▶ AIホスピタル

慶應義塾大学病院は、2018年10月に内閣府の戦略的イノベーション創造プログラム「AI（人工知能）ホスピタルによる高度診断・治療システム」に採択され、IT化・AI化を推進しています。

近年急速に進歩してきたさまざまなICT、AI技術を病院内に実装・統合し、実現可能なAIホスピタルモデルを構築して、現場の効率化を図りながら以下の良質な医療を提供していくことを目指しています。

- ・患者に安心・安全な医療の提供
- ・患者に高度で先進的な医療サービスの提供
- ・医師・医療スタッフの負担軽減
- ・地域・在宅の高度なサポート

2020年11月現在では、外来部門、検査部門、薬剤部門、病棟部門、手術部門などにおいて、計28個のプロジェクトが進行しています。

これらを大きく分類すると、①セキュリティの高い医療情報データベースの構築、②自動音声口述筆記によるコミュニケーション支援、③ロボットによる医療従事者の負担軽減、④患者情報の共有化（遠隔、在宅）の4つに分けられます。

例えば、患者さんにとって分かりやすい取り組みとしては、デジタルサイネージを活用した病院からの情報提供や癒しコンテンツの配信、スマホアプリへの血液検査結果のデジタル送信、外来待合のスマホ呼び出し、待合混雑監視のためのAIカメラ導入、患者さんが自由に乘れる自動運転付き電動車いすの導入などがあげられます。

今後も、AIを活用し、患者さんに安心・安全、かつ高度で先進的な医療サービスの提供に努めてまいります。



自動運転付き電動車いすにて院内を移動する様子

## <研究>

# 革新的医療技術創出拠点・臨床研究中核病院としての取り組み

## 橋渡し研究支援

慶應義塾大学病院では、慶應義塾大学のみならず多くのアカデミア研究機関における基礎研究の成果（研究シーズ）を早期に臨床応用・実用化に繋げるための開発支援をしております。支援シーズについては、データベースによるパイプライン一括管理を行い、シーズ開発関係者間で研究開発戦略を共有し、各研究のステップに応じた必要な支援を行うことができる体制を整えています。2019年度からは医療分野外からの医療応用可能な技術を発掘・育成する取り組みを開始し、これまでにない革新的な医療技術の実用化を推進しております。

研究シーズの開発 3つの段階	シーズA: 関連特許出願を目指す基礎研究課題 シーズB: 非臨床POC(概念実証: Proof of Concept)取得及び治験届出を目指す課題 シーズC: 治験又は高度医療等を実施し、臨床POCを目指す課題
-------------------	---

## 研究シーズの段階と、領域別のシーズ開発支援状況

2020年10月1日現在の支援シーズは合計131件

	精神	神経	眼	耳鼻咽喉	歯	呼吸器	循環器	消化器	腎	泌尿器	生殖器	血液	筋骨格	皮膚	がん	免疫	内分泌代謝	感染	疼痛	小児	その他	重複を除く合計
A.基礎研究	2	8	2	3	0	1	1	5	0	2	1	4	3	2	21	7	0	2	0	1	5	56
B.非臨床試験	2	5	3	3	0	3	2	7	1	1	0	4	4	2	12	5	0	2	0	0	4	51
C.臨床試験	2	3	0	2	1	1	1	2	0	0	2	0	3	5	9	4	1	0	1	1	1	24

## 橋渡し研究支援による主要な研究領域

<b>がん(42件)</b>	シーズ開発の中で最多の件数を占めるのは、がんを対象としたシーズであり、医薬品・医療機器・再生医療等製品の薬事承認申請に向けて研究開発を進めています。
<b>免疫(16件)</b>	慶應義塾大学病院免疫統括医療センターにおいて、診療科横断的に免疫疾患に対する生物学的製剤治療を実施するとともに、新規治療法の開発を進めています。
<b>再生医療(18件)</b>	国の進める再生医療実現の事業拠点の一つとして、iPS細胞を用いた再生医療を始めとした様々な治療法の実用化を推進しています(対象例: 脊髄、心筋、角膜等)。

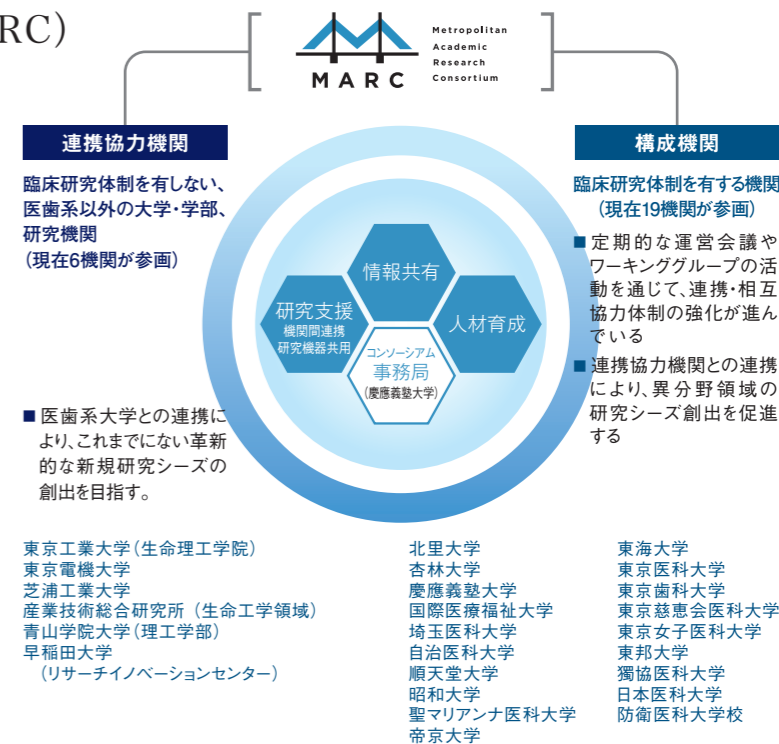
## 首都圏ARコンソーシアム(MARC)

首都圏ARコンソーシアム(MARC: Metropolitan Academic Research Consortium)は、日本初の革新的な医薬品・医療機器を医療現場に届けるために、首都圏の私立医科大学をはじめとした臨床研究機関が連携・協力関係を結び、アカデミアの基礎研究の成果を実用化につなげる非臨床・臨床一体型の橋渡し研究体制を構築し、人材育成や情報共有を図ることを目的として、2017年1月に設立されました。

2020年5月現在、19の大学が構成機関として、また6つの医歯系以外の大学や研究機関が連携協力機関として参画し、革新的な新規研究シーズの創出の体制が整ってきました。

定期的開催される運営会議やワーキンググループ(体制整備、シーズ発掘、教育・人材交流、臨床研究)の活動により、MARC構成機関・連携協力機関との連携・相互協力体制を強化しています。

MARC Webサイト: <https://marc-med.org/>



東京工業大学(生命理工学院)  
東京電機大学  
芝浦工業大学  
産業技術総合研究所(生命工学領域)  
青山学院大学(理工学部)  
早稲田大学  
(リサーチイノベーションセンター)

北里大学  
杏林大学  
慶應義塾大学  
国際医療福祉大学  
埼玉医科大学  
自治医科大学  
順天堂大学  
昭和大学  
聖マリアンナ医科大学  
帝京大学

東海大学  
東京医科大学  
東京歯科大学  
東京慈恵会医科大学  
東京女子医科大学  
東邦大学  
獨協医科大学  
日本医科大学  
防衛医科大学校



# 基礎・臨床一体型の教育

－ 未来を拓く医療人の育成を目指して －

初代医学部長・病院長の北里柴三郎博士が提唱したのは、「基礎医学と臨床医学の連携を緊密にし、学内は融合して一家族の如く」という基本理念でした。さまざまな症例の実績を持つ慶應義塾大学病院は、臨床の現場から、患者さん一人ひとりに最適な医療を提供することを通じて、次世代の良質な医療に発展させ、医療に加えて臨床研究においても先導的な役割を果たしています。

この「基礎・臨床一体型の理念」は、患者さん中心の医療を実践するプロフェッショナリズムに根づいた慶應義塾大学病院の未来を拓く医療人材育成のバックボーンとして、今日に至るまで脈々と息づいています。

## 1 医師の育成

### 医学部生教育 臨床実習

慶應義塾大学病院では、医学部第4学年3学期から第6学年2学期まで臨床実習が行われます。臨床実習では5～7名の小グループに分かれて各診療科をまわり、直接患者さんに接することで医学・医療的な知識を深め技術を高めるとともに、責任感や指導力、協調性など、医療に携わる者として不可欠な能力を習得します。近年、臨床実習の重要性が増しており、慶應義塾大学でもその充実化を図っています。

臨床実習には、診療科により診療参加型と見学型の2つの方法があります。近年主流になっている診療参加型臨床実習とは、学生が医療チームの一員となって研修医、指導医とともに診療にあたり、その過程で臨床医学を学ぶ方法です。学生が実際に診断や治療方針の最終決定をすることはありませんが、自分の力で患者さんから話を聞き、診察をして、診断や治療を考える機会を与えられます。また、臨床に直接参加することによって勉学への強い動機付けが得られます。



シミュレーターを活用した臨床実習



形成外科学教室における臨床実習



初期臨床研修におけるクリニカルシミュレーションラボでのトレーニング

### 初期臨床研修教育

初期臨床研修プログラムは、研修医としての基本的な知識と診療技能、考え方や行動規範を学ぶことを目的としています。慶應義塾大学病院は多数の優秀な指導医を擁しており、最高の研修環境が整備されています。また、先輩の後期研修医(専修医)による直接的な研修指導、生活や進路面での相談など、直近の上級医とのコミュニケーションも円滑に行われています。

### 後期臨床研修教育

慶應義塾大学病院では、後期臨床研修を通じて、専門知識・技術と豊かな人間性を兼ね備えた、患者さんや医療スタッフに信頼される臨床医を育成しています。

さらに、大学病院での研修に加え、関連施設と緊密に連携して、専門診療のほかプライマリーケア・地域医療から集学的医療・高度先進医療まで多彩でユニークな研修が行われています。

### 慶應義塾大学 医療系学部・大学院学生数(2019年度)

大学院	医学研究科	434
	健康マネジメント研究科	130
	薬学研究科	155
大学	医学部	682
	看護医療学部	430
	薬学部	1,177

### 医師研修受け入れ人数 (2019年度)

初期臨床研修(研修医課程)	129
後期臨床研修(専修医課程)	729

上記のほか、専門職を目指す実習生を学外から236人(2019年度延べ)受け入れました。

## 2 看護師・薬剤師の育成

### 看護医療学部生・薬学部生 臨床実習

看護医療学部生・薬学部生は、病棟、外来、薬剤調剤、調製室などをフィールドに臨床実習を行い、看護師や薬剤師の指導のもと、チーム医療の実際を学んでいます。臨床実習は医療の実際を知る貴重な場であり、学部と病院看護部、薬剤部が協同して取り組み、よりよい人材の育成を目指しています。

### 三学部合同教育

慶應義塾大学では、医療系三学部(医学部、看護医療学部、薬学部)で合同教育を行い、学生のうちから多職種間の交流を深め、将来、患者さん中心のグループアプローチによる医療が実践できる医療人に成長することをサポートしています。

新病院棟完成に伴い、医療系三学部による合同臨床実習を充実させていきます。

詳細 ▶ <http://ipe.keio.ac.jp/>

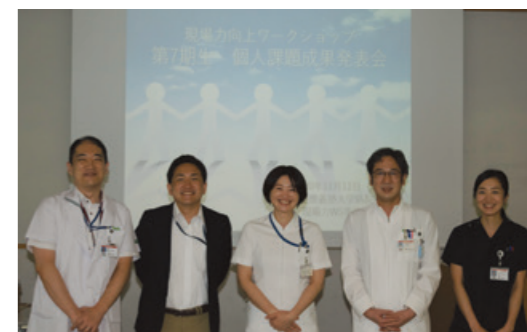


医療系三学部合同臨床実習



## 3 メディカルスタッフの育成

2012年度より事務スタッフを含めたメディカルスタッフを対象に、現場力の向上を目標に掲げた研修を行っています。各職場で生じている課題をテーマに、収支改善を意識した問題解決のトレーニングを行っています。多職種からなるグループで検討することにより、課題解決能力を向上させるとともに、職場の活性化やチーム医療推進の一役を担っています。



現場力向上ワークショップ第7期個人課題成果発表会

## 4 病院経営人材の育成

慶應義塾大学は、2017年度文部科学省大学教育再生戦略推進費「課題解決型高度医療人材養成プログラム」に採択されました。これに基づき、健康マネジメント研究科・経営管理研究科・医学研究科・大学病院が協働して、構想力、戦略的な意思決定、実行力に富んだ病院の経営リーダーを育成することを目的とした病院経営人材育成プログラムを開始し、2018年度以降、各年度3名ずつ病院から派遣しています。慶應型ケースメソッドをベースとする本プログラムは、その成果を公開し、他大学・大学病院や地域基幹病院の経営人材育成にも広く資することを目指しています。

## 5 外部からの実習生受け入れ

外部施設より多職種の学生実習を受け入れています。(右表参照) 学生は、病院というフィールドで医療者とともに実習し、高度医療とともに患者さん中心のチーム医療の実際を学んでいます。

看護師や臨床検査技師の領域では、有資格者の上級資格取得を目的とした臨床実習を、他医療機関から受け入れて行っています。また、地域の若手リハビリ技士の実習も受け入れ地域の医療者育成のための実習なども行い、医療の質向上に貢献しています。

### 学生臨床実習受け入れ状況 (2019年度)

実習生	実習受け入れ施設数
リハビリテーション科(OT・PT・ST)	14
放射線技術室(診療放射線技師)	6
医用工学室(臨床工学技士)	6
歯科口腔外科(歯科衛生士)	5
食養管理室(管理栄養士)	4
看護部(専門看護師・認定看護師)	3
臨床検査技術室(臨床検査技師)	2
眼科(視能訓練士)	2
耳鼻咽喉科	1
感染制御部	1



1835年 福澤諭吉、大阪中津藩蔵屋敷で誕生

1855年 福澤諭吉、緒方洪庵の適塾に入門

1858年 慶應義塾開塾 江戸築地鉄砲洲に蘭学塾を開く

1860年 福澤諭吉、はじめての外遊 咸臨丸で渡米

1862年 福澤諭吉、遣欧使節として欧州各国を巡歴

1868年 慶應義塾と命名

1871年 慶應義塾、三田に移転

1873年 三田山上に「慶應義塾医学所」設立(～1880年)

1890年 大学部を発足し、文学・理財・法律3科を設置

1892年 北里柴三郎博士を所長とする伝染病研究所設立

1893年 北里柴三郎博士、土筆ヶ岡養生園設立

1901年 2月3日、福澤諭吉逝去

1917年 慶應義塾大学部医学科開設  
4月、医学科予科の授業を三田山上で開始  
11月、四谷区信濃町の陸軍用地を購入

1918年 医学科附属看護婦養成所開設(～2000年)

1920年 4月、文学・経済学・法学・医学の4学部からなる総合大学へ  
11月6日、医学部開校ならびに大学病院開院式  
11月8日、慶應医学会第一回総会開催  
翌大正10(1921)年『慶應医学』創刊

1922年 医学部附属産婆養成所開設

1923年 関東大震災(火災にあった病院の救済・診療を支援。32万4千人以上の患者を診療。)

1924年 大学病院特別病棟竣工

1926年 食養研究所設立(～1990年)

1928年 多磨墓地に医学研究に献体されたご遺体を葬り冥福を祈るための納骨堂建設  
第一回の解剖諸霊供養法会を芝増上寺で開催

1929年 ロックフェラー財団寄付により、予防医学校舎竣工

1932年 新赤倉温泉の地に三四会、赤倉山荘建設  
(昭和35(1960)年焼失、平成6(1994)年再建)

1932年 病院別館竣工  
(鉄筋コンクリート地下1階地上4階建、219病床)

1934年 福澤諭吉生誕100年ならびに日吉開校記念祝賀会開催

1936年 日吉第二校舎竣工、日吉キャンパスで医学部教育開始

1937年 北里記念医学図書館竣工

1937年 特殊薬化学研究所設立

1941年 月ヶ瀬温泉治療学研究所開設  
昭和33(1958)年狩野川台風により流失、同年廃止

1944年 軍医不足という社会的要請を受け大学附属医学専門部を開設し、463名の人材を輩出(～1951年)



福澤諭吉



北里柴三郎博士



1920年大学病院開院式 開院当時の病院全景 開院当時の病院玄関内部

1945年 5月24日、空襲により医学部・病院施設の約6割焼失

1945年 8月15日、終戦

1946年 基礎医学教室、武蔵野分校へ移転(～1956年春)

1948年 病院本館竣工(戦後最大の木造建築2階建、153病床)

1950年 エール大学ロング教授らを招聘し、CPC(臨床・病理症例検討会)開始

1950年 電子顕微鏡研究室開室

1950年 医学部附属厚生女子学院開設

1952年 新制大学医学部発足  
"The Keio Journal of Medicine"創刊

1952年 北里柴三郎博士生誕100年  
三四会より第一回北里賞授与

1955年 進学課程2年、専門課程4年の戦後の医学教育体系確立

1956年 大学院医学研究科(博士課程)設置

1958年 慶應義塾創立100年記念式典

1961年 米国チャイナ・メディカル・ボードの寄付を受け、基礎医学第二校舎竣工

1963年 病院中央棟竣工

1965年 病院1号棟竣工  
「財団法人慶應がんセンター」発足(～2002年)

1967年 医学部創立50周年記念式

1969年 「医学部改革委員会」設置、臨床講堂竣工

1970年 「財団法人慶應健康相談センター」発足(～2008年)

1972年 北里記念医学図書館(1971年より医学情報センター)の情報サービス部門を独立、「財団法人国際医学情報センター」発足

1973年 病院ボランティア導入(日本病院ボランティア協会に入会)

1974年 三重県伊勢市の病院の寄付を受け、慶應義塾大学伊勢慶應病院を開院(～2003年)

1977年 月ヶ瀬リハビリテーション・センター開設(～2011年)

1979年 医学部共同利用R.I.(ラジオアイソトープ)研究棟竣工

1983年 慶應義塾創立125年記念式典

1984年 米国医科大学での学生臨床研修開始

1986年 大学病院新棟(現2号館)竣工

1988年 看護短期大学開設(～2000年)

1990年 第一回自主学習成果発表会



病院本館玄関 病院本館受付



医学部附属厚生女子学院卒業式



医学部創立50周年記念式



大学病院新棟(現2号館)開院当時の病院全景 大学病院正面玄関

1994年 特定機能病院として認定

1994年 大学院医学研究科(修士課程)設置

1996年 医学部新教育研究棟竣工

1996年 坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金による第一回慶應医学賞授賞式および記念講演会開催

2001年 看護医療学部開設

2001年 総合医科学研究棟竣工・リサーチパーク発足

2007年 クリニカルリサーチセンター発足  
「信濃町キャンパス改革・刷新プロジェクト」設置(～2008年3月)



総合医科学研究棟

2008年 共立薬科大学との合併により、薬学部開設  
慶應義塾創立150年記念式典  
臨床研究棟竣工

2010年 3号館(北棟)竣工

2011年 東日本大震災、慶應義塾救援医療団派遣  
医療系三学部(医看薬)による合同教育開始

2012年 総合医療情報システム(電子カルテ)導入  
3号館(南棟)竣工・予防医療センター開設

2015年 1号館(I期棟)竣工

2016年 臨床研究中核病院として認定

2017年 医学部開設100年  
JSR・慶應義塾大学 医学化学イノベーションセンター(通称JKIC)開所

2018年 1号館(II期棟)竣工・1号館開院  
慶應看護100年

2020年 大学病院開院100年

## 福澤諭吉と北里柴三郎

### 福澤諭吉が北里柴三郎に贈った『贈医(医に贈る)』という言葉

慶應義塾の創立者である福澤諭吉は日本の文明開化の精神的支柱を打ち立て、『学問のすゝめ』等の多くの著作や多くの言葉を残しました。のちに初代医学部長となる北里柴三郎博士が、伝染病研究所の設立に尽力した時に、福澤は北里に『贈医(医に贈る)』と命名した七言絶句の漢詩を贈っています。その意味は概略すると以下ようになります。

医学は天と人との限りの無い勝負である。医師よ『自然(の回復)を助ける立場である』などと言わないでもらいたい。離婁<sup>\*1</sup>のような眼力と、麻姑<sup>\*2</sup>のような手によって、手段をつくすことこそ医学の真髄なのだ。

\*1 離婁[リロウ] 中国の古伝説上の名。百歩離れた場所にある毛ほどの小さいものも見る事ができる視力をもつという。  
\*2 麻姑[マコ] 仙女の名。美しく、手のつめが長く、鳥のようだったという。「孫の手」は麻姑の手が語源とされる。



贈医の七言絶句

### 福澤諭吉と北里柴三郎(『慶應義塾豆百科』より)

人の一生にとって、ある出会いがその人の生涯を決めることがある。北里柴三郎の場合も、福澤先生と出会ったことが、彼の人生行路を決定づける上で、大きな役割を果たしたことは否み得ない。北里は熊本の人で、東京医学校を卒えるや内務省衛生局に入り、当時の局長長与専齋の知遇を得、明治18年(1885年)ドイツに留学、コッホに師事して細菌学を学び、破傷風菌の純粋培養と血清療法を発見するなど、数多くのすぐれた研究成果を挙げ、明治25年(1892年)に帰朝した。当時の日本は衛生状態もきわめて悪く、各種の伝染病が流行していた。北里は1日も早く伝染病研究所を設立することの急務を説いたが、そこには多くの困難があった。北里の終始変わらぬ庇護者であった長与はこうした北里の窮状を福澤先生に打ち明けその援助を求めたのである。先生にとって長与は緒方塾以来の親友であり、かつ北里の業績にもかかねてから注目していただだけに、早速同年10月4日付の時事新報に「医術の新発見」と題する社説を掲げて彼の業績を紹介するとともに、知友の実業家森村市左衛門と協力して芝公園の御成門脇に研究所を建て、北里の使用に供したのであった。伝染病研究所としてはわが国嚆矢のものである。この研究所はその後大日本私立衛生会の所管となり、場所も芝愛宕下に移ったが、その時も地域住民の激しい反対に対し、先生は時事新報紙上で情理を尽くして説得に当たったことも、北里には忘れられ得ぬ感銘であった。

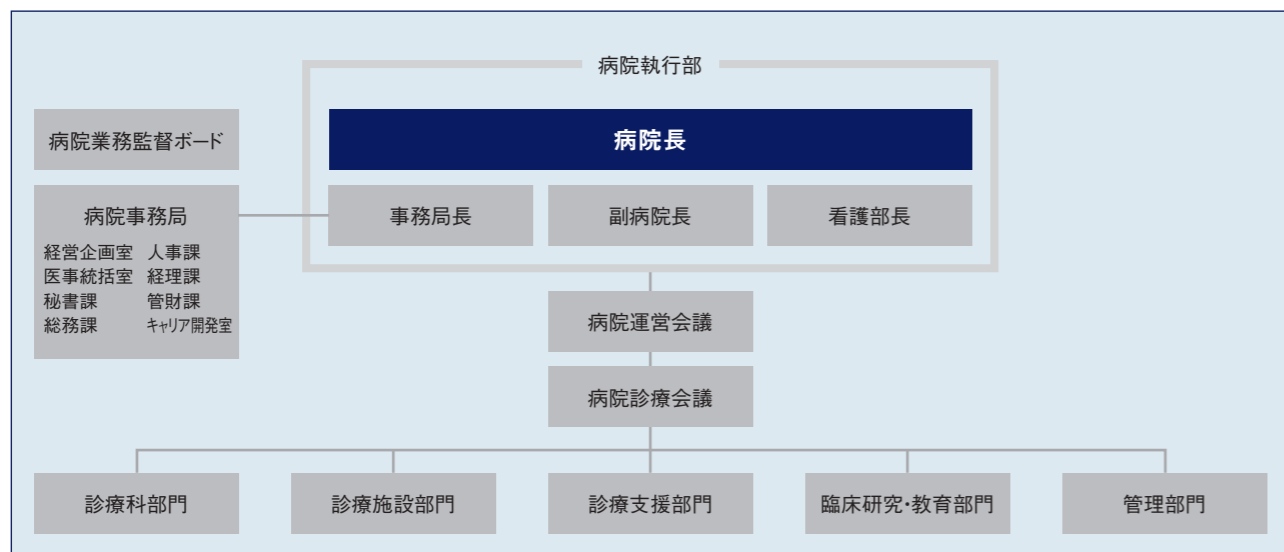
さらに明治32年(1899年)には国立に移管されたが、その際も福澤先生は政府の方針でいつ施策が変わるかも知れないから、それに備えて資金を蓄えておくよう助言を与えたのであった。そればかりか明治26年(1893年)に北里をして芝白金に結核療養所土筆(つくし)ヶ岡養生園を建てさせ、万一の場合に備えさせることにしたのである。果たせるかな大正3年(1914年)、政府は北里に一言の相談もなく、研究所の所管を内務省から文部省に移し、東京大学の傘下に入れるよう組織がえを図ったのである。北里は断然職を辞し、福澤先生の助言で用意しておいた私財30万円を投じて養生園の敷地内に新たに研究所を興した。今日の北里研究所がそれである。従って大正6年(1917年)、慶應義塾が医学部開設に際し、北里自身が門下の俊秀を率いてその創設に心血を注いだのは、福澤先生との出会いによって受けた過去の恩誼に、いささかでも報いたい気持ちからであったことはたしかであろう。



# 組織

## 運営体制

(2020年11月1日現在)



## 組織の構成

(2020年11月1日現在)

### 病院長・副病院長・病院事務局長

病院長	(管理者)	北川 雄光
副病院長		大家 基嗣
副病院長		松本 守雄
副病院長		佐谷 秀行

副病院長		陣崎 雅弘
副病院長		長谷川 奉延
副病院長		三村 將
病院事務局長		松田 美紀子

### 病院長補佐

病院長補佐	福永 興吉
-------	-------

病院長補佐	藤澤 大介
-------	-------

### 診療科部門

呼吸器内科	診療科部長(教授)	福永 興吉
循環器内科	診療科部長(教授)	福田 恵一
消化器内科	診療科部長(教授)	金井 隆典
腎臓・内分泌・代謝内科	診療科部長(教授)	伊藤 裕
神経内科	診療科部長(教授)	中原 仁
血液内科	診療科部長(教授)	片岡 圭亮
リウマチ・膠原病内科	診療科部長(准教授)	金子 祐子
一般・消化器外科	診療科部長(准教授)	尾原 秀明
呼吸器外科	診療科部長(教授)	浅村 尚生
心臓血管外科	診療科部長(教授)	志水 秀行
脳神経外科	診療科部長(教授)	戸田 正博
小児外科	診療科部長(教授)	黒田 達夫
整形外科	診療科部長(教授)	松本 守雄
リハビリテーション科	診療科部長(教授)	辻 哲也
形成外科	診療科部長(教授)	貴志 和生
小児科	診療科部長(教授)	高橋 孝雄

産科	診療科部長(教授)	田中 守
婦人科	診療科部長(教授)	青木 大輔
眼科	診療科部長(教授)	根岸 一乃
皮膚科	診療科部長(准教授)	谷川 瑛子
泌尿器科	診療科部長(教授)	大家 基嗣
耳鼻咽喉科	診療科部長(教授)	小川 郁
精神・神経科	診療科部長(教授)	三村 將
放射線治療科	診療科部長(教授)	茂松 直之
放射線診断科	診療科部長(教授)	陣崎 雅弘
麻酔科	診療科部長(教授)	森崎 浩
救急科	診療科部長(教授)	佐々木 淳一
歯科・口腔外科	診療科部長(教授)	中川 種昭
総合診療科	診療科部長(准教授)	藤島 清太郎
臨床検査科	診療科部長(教授)	村田 満
病理診断科	診療科部長(准教授)	大喜多 肇

## 診療施設部門

予防医療センター	センター長(教授)	高石 官均
血液浄化・透析センター	センター長(教授)	大家 基嗣
内視鏡センター	センター長(教授)	緒方 晴彦
腫瘍センター	センター長代行(教授)	大家 基嗣
輸血・細胞療法センター	センター長(教授)	田野崎 隆二
スポーツ医学総合センター	センター長(教授)	佐藤 和毅
漢方医学センター	センター長(教授)	三村 將
臨床遺伝学センター	センター長(教授)	小崎 健次郎
免疫統括医療センター	センター長(准教授)	金子 祐子
緩和ケアセンター	センター長(准教授)	橋口 さおり
手術・血管造影センター	センター長(教授)	松本 守雄
集中治療センター	センター長(教授)	森崎 浩
救急センター	センター長(教授)	松本 守雄

## 診療支援部門

看護部	部長	加藤 恵里子
薬剤部	部長代行(教授)	三村 將
滅菌管理部	部長(准教授)	尾原 秀明
食養管理室	室長代理	大木 いつみ
医用工学室	室長(教授)	大家 基嗣
放射線技術室	室長	田原 祥子
臨床検査技術室	室長	横田 浩充

## 臨床研究・教育部門

臨床研究推進センター	センター長(教授)	佐谷 秀行
臨床研究監理センター	センター長(教授)	長谷川 奉延
卒後臨床研修センター	センター長(教授)	平形 道人

## 管理部門

病院情報システム部	部長(教授)	陣崎 雅弘
医療安全管理部	部長(教授)	長谷川 奉延
感染制御部	部長(教授)	長谷川 直樹
患者総合相談部	部長(教授)	三村 將
医療連携推進部	部長(教授)	大家 基嗣
放射線安全管理室	室長(教授)	茂松 直之
医療保険指導部	部長(准教授)	石井 誠

## 診療クラスター

IBD(炎症性腸疾患)センター	センター長(教授)	金井 隆典
メモリーセンター	センター長(教授)	三村 將
周産期・小児医療センター	センター長(教授)	高橋 孝雄
母斑症センター	センター長(教授)	高橋 孝雄
プレストセンター	センター長(専任講師)	林田 哲
リプロダクションセンター	センター長(専任講師)	浜谷 敏生
骨転移診療センター	センター長(専任講師)	中山 ロバート
睡眠センター	センター長(教授)	三村 將
痛み診療センター	センター長(専任講師)	小杉 志都子
肉腫・メラノーマセンター	センター長(専任講師)	中山 ロバート
消化器センター	センター長(教授)	金井 隆典
呼吸器センター	センター長(教授)	浅村 尚生
アレルギーセンター	センター長(教授)	福永 興吉
頭蓋底センター	センター長(教授)	戸田 正博
臓器移植センター	センター長(准教授)	尾原 秀明
循環器センター	センター長(教授)	志水 秀行
小児頭蓋顔面(クラニオ)センター	センター長(教授)	貴志 和生
性分化疾患(DSD)センター	センター長(教授)	長谷川 奉延
糖尿病先制医療センター	センター長(教授)	伊藤 裕
脳卒中センター	センター長(教授)	中原 仁

## 病院業務監督ボード

委員長	常任理事	竹内 勤
委員	(学外)	貝沼 由久
委員	(学外)	菊池 廣之
委員	(学外)	小松本 悟
委員	塾監局長	高野 仁
アドバイザー	常任理事	青山 藤詞郎
アドバイザー	常任理事	大石 裕
アドバイザー	常任理事	高橋 郁夫
アドバイザー	常任理事	渡部 直樹
アドバイザー	(学外)	新木 一弘
アドバイザー	医学部長	天谷 雅行

※順不同



# 役割と機能

## 特定機能病院 – さまざまな連携と最適な医療の実践 –

患者さん一人ひとりの症状に合った適切な医療を提供するために、病院、診療所、クリニックといった各医療機関は、それぞれが持つ機能によってさまざまな役割を担っています。その中で慶應義塾大学病院は、国や自治体から「特定機能病院」「地域がん診療連携拠点病院(高度型)」といった役割の指定を受けています。

当院では、高度な医療を提供するとともに、高度な研究・開発・研修を行う「特定機能病院」として、一般の医療機関では実施することが難しい専門医療を必要とする患者さんや、病気が進行中の急性期の患者さんの治療を行うため、他の病院や診療所から紹介を受けた患者さんの診療を行っています。また、継続的なフォローアップなど、患者さんにとって地元の医療機関の方が通院に適切な場合、紹介元の医療機関へ再び紹介する(逆紹介)ことも行っています。

また、当院では、下記をはじめとする、さまざまな体制で、他の医療機関と、より結びつきの強い連携を行っています。

連携機関	慶應義塾大学関連病院会	慶應義塾大学医学部三四会医療機関
	連携契約医療機関	地域医療機関・介護・保健機関
	救急連携医療機関	その他

## 臨床研究中核病院

臨床研究中核病院は、日本発の革新的な医薬品・医療機器・医療技術の開発に必要な質の高い臨床研究や治験を推進するため、国際水準の臨床研究や医師主導治験の中心的役割を担う病院として、厚生労働大臣が承認するものです。承認要件として、臨床研究計画の立案と実施の実績、臨床研究支援体制、データ管理体制、安全管理体制、倫理審査体制、利益相反管理体制、知的財産管理・技術移転体制、国民への普及・啓発および研究対象者への相談体制など、さまざまな体制整備が求められます。慶應義塾大学病院は2016年3月25日に、私立大学としては初めての承認を受けています。

## 病院開設許可(承認)、法令等による医療機関の指定等状況

### 病院開設許可(承認)

名称	指定等の年月日
医療法第7条第1項による開設許可(承認)	1920年11月 6日
特定機能病院の名称の使用承認	1994年 2月 1日
医療法第4条の3第1項に規定する臨床研究中核病院の承認	2016年 3月25日

### 法令等による医療機関の指定

名称	指定等の年月日	
消防法による救急医療(救急病院・診療所)	1965年 3月18日	
健康保険法による(特定承認)保険医療機関	1986年 1月 1日	
国民健康保険法による(特定承認)療養取扱機関	1986年 1月 1日	
労働者災害補償保険法による医療機関	1959年 2月 6日	
地方公務員災害補償法による医療機関	1959年 2月 6日	
原爆医療法	一般医療 1960年10月 1日	
戦傷病者特別援護法による医療機関	1954年11月 4日	
母子保健法	妊娠中毒	1972年10月 1日
	妊婦・乳児健康診査	1972年10月 1日
	養育医療	1959年 2月 6日
生活保護法による医療機関	1956年 5月 2日	
児童福祉法	育成医療	1952年 8月 1日
	療育医療	1952年 8月 1日
	小児慢性特定疾病医療	2015年 1月 1日

### 先天性血液凝固因子障害等治療研究事業

名称	指定等の年月日
先天性血液凝固因子欠乏症	1989年 9月 1日

名称	指定等の年月日
難病法による医療機関	2015年 1月 1日
身体障害者福祉法による医療	1954年11月 4日
精神保健法による医療機関	1965年10月 1日
結核予防法による医療機関	1960年10月 4日
臨床修練指定病院(外国医師・外国歯科医師)	1988年 3月29日
エイズ拠点病院認定	1996年11月15日
災害拠点病院指定	1997年 2月28日
地域がん診療連携拠点病院(高度型)	2019年 4月 1日
地域周産期母子医療センター	2004年 6月 1日
地域リハビリテーション支援センター	2004年10月 1日
結核指定医療機関	2011年 2月 1日
DMAT指定医療機関	2013年 8月17日
がんゲノム医療中核拠点病院	2018年 4月 1日

## 先進医療

先進医療は、国民の安全性確保と患者負担の増大防止という2つの観点を踏まえつつ、将来的な保険導入のための評価を行うもの(評価療養)として、特例として保険診療との併用が認められる制度です。医療技術ごとに一定の施設基準が設定されています。

先進医療A
1 未承認等の医薬品、医療機器若しくは再生医療等製品の使用又は医薬品、医療機器若しくは再生医療等製品の適応外使用を伴わない医療技術(後述先進医療B内、2に掲げるものを除く。)
2 以下のような医療技術であって、当該検査薬等の使用による人体への影響が極めて小さいもの (1)未承認等の体外診断用医薬品の使用又は体外診断用医薬品の適応外使用を伴う医療技術 (2)未承認等の検査薬の使用又は検査薬の適応外使用を伴う医療技術
先進医療B
1 未承認等の医薬品、医療機器若しくは再生医療等製品の使用又は医薬品、医療機器若しくは再生医療等製品の適応外使用を伴う医療技術(前述先進医療A内、2に掲げるものを除く。)
2 未承認等の医薬品、医療機器若しくは再生医療等製品の使用又は医薬品、医療機器若しくは再生医療等製品の適応外使用を伴わない医療技術であって、当該医療技術の安全性、有効性等に鑑み、その実施に係り、実施環境、技術の効果等について特に重点的な観察・評価を要するものと判断されるもの。 (平成31年3月29日付 医政発0329第8号、薬生発0329第64号、保発0329第6号より引用)

### 慶應義塾大学病院で実施中の先進医療

2020年10月1日現在

	名称	実施診療科	承認年月日
先進医療A	抗悪性腫瘍剤治療における薬剤耐性遺伝子検査／悪性脳腫瘍	脳神経外科	2013年12月 1日
先進医療B	パクリタキセル静脈内投与(一週間に一回投与するものに限る。)及びカルボプラチン腹腔内投与(三週間に一回投与するものに限る。)の併用療法／上皮性卵巣がん、卵管がん又は原発性腹膜がん	産婦人科	2013年 1月 1日
	腹腔鏡下センチネルリンパ節生検／早期胃がん	一般・消化器外科	2014年 1月 1日
	全身性エリテマトーデスに対する初回副腎皮質ホルモン治療におけるクロピドグレル硫酸塩、ピタバスチンカルシウム及びトコフェロール酢酸エステル併用投与の大腿骨頭壊死発症抑制療法／全身性エリテマトーデス(初回の副腎皮質ホルモン治療を行っている者に係るものに限る。)	リウマチ・膠原病内科	2014年 8月 1日
	ヒドロキシクロロキン療法／関節リウマチ(既存の合成抗リウマチ薬による治療でDAS28が二・六未満を達成できないものに限る。)	リウマチ・膠原病内科	2016年11月 1日
	水素ガス吸入療法／心停止後症候群(院外における心停止後に院外又は救急外来において自己心拍が再開し、かつ、心原性心停止が推定されるものに限る。)	救急科	2016年12月 1日
	テモゾロミド用量強化療法／膠芽腫(初発時の初期治療後に再発又は増悪したものに限り。)	脳神経外科	2017年 1月 1日
	トラスツズマブ静脈内投与及びドセタキセル静脈内投与の併用療法／乳房外パジェット病(HER2が陽性であって、切除が困難な進行性のものであり、かつ、術後に再発したもの又は転移性のものに限る。)	皮膚科	2017年 2月 1日
	反復経頭蓋磁気刺激療法／薬物療法に反応しない双極性障害の抑うつエピソード	精神・神経科	2019年 5月 1日
	イマチニブ経口投与及びベムプロリズマブ静脈内投与の併用療法／進行期悪性黒色腫(KIT遺伝子変異を有するものであって、従来の治療法に抵抗性を有するものに限る。)	皮膚科	2020年 2月 1日



# 資料

## 基礎データ

区分	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
許可病床数(床)	1,044	1,044	1,044	960	960
病床稼働率(%)	83.1	84.9	83.3	82.7	88.1
外来患者延べ人数(人)	827,169	816,242	827,113	846,718	871,454
1日平均外来患者数(人)	3,064	3,057	3,086	3,183	3,252
入院患者延べ人数(人)	287,298	291,603	286,188	290,895	309,641
1日平均入院患者数(人)	785	799	784	797	846
平均在院日数(日)	11.5	11.8	11.2	11.4	11.6
手術件数(件)	14,380	14,884	14,942	15,450	16,466
手術全身麻酔件数(件)	7,566	7,786	8,234	8,282	8,847
救急患者数(人)	17,478	16,239	17,056	17,022	16,536
紹介率(%)	87.3	85.7	84.4	81.8	81.0
逆紹介率(%)	46.4	46.1	43.4	40.4	41.6
分娩件数(件)	650	634	567	618	642
セカンドオピニオン(人)	485	478	434	409	468

※許可病床数は各年度3月31日時点の病床数。 ※病床稼働率は届出病床数を元に算出。

外来患者数(人)		入院患者数(人)	
	(2019年度)		(2019年度)
年間新規患者数	45,649	年間新規患者数	26,209
年間延べ患者数(再掲)	871,454	年間延べ患者数(再掲)	309,641
1日平均患者数(再掲)	3,252	1日平均患者数(再掲)	846

## 診療科別データ

診療科名	外来患者数					
	年間			1日平均		
	初診	再診	合計	初診	再診	合計
呼吸器内科	837	31,965	32,802	3	119	122
循環器内科	1,304	38,918	40,222	5	145	150
消化器内科	2,035	71,298	73,333	8	266	274
腎臓・内分泌・代謝内科	772	57,114	57,886	3	213	216
神経内科	798	25,888	26,686	3	97	100
血液内科	296	17,373	17,669	1	65	66
リウマチ・膠原病内科	565	31,607	32,172	2	118	120
一般・消化器外科	882	35,099	35,981	3	131	134
呼吸器外科	507	7,546	8,053	2	28	30
心臓血管外科	165	6,628	6,793	1	25	25
脳神経外科	753	10,540	11,293	3	39	42
小児外科	160	2,831	2,991	1	11	11
整形外科	3,813	49,580	53,393	14	185	199
リハビリテーション科	136	7,287	7,423	1	27	28
形成外科	1,033	9,489	10,522	4	35	39
小児科	1,971	21,995	23,966	7	82	89
産婦人科	2,972	56,500	59,472	11	211	222
眼科	3,505	52,130	55,635	13	195	208
皮膚科	2,110	44,501	46,611	8	166	174
泌尿器科	1,099	37,654	38,753	4	141	145
耳鼻咽喉科	2,786	37,118	39,904	10	139	149
精神・神経科	961	37,448	38,409	4	140	143
放射線治療科	96	19,223	19,319	0	72	72
放射線診断科	909	422	1,331	3	2	5
麻酔科	219	15,554	15,773	1	58	59
救急科	5,165	2,400	7,565	19	9	28
歯科・口腔外科	5,787	43,188	48,975	22	161	183
総合診療科	284	5,839	6,123	1	22	23
その他	3,729	48,670	52,399	14	182	196
合計	45,649	825,805	871,454	170	3,081	3,252

※1日平均を表示する際に端数を四捨五入しているため、合計などにおいて差異が生じる場合があります。

## 入院患者数・平均在院日数

(2019年度)

診療科名	入院患者数(人)		平均在院日数
	年間	1日平均	
呼吸器内科	18,058	49	12.7
循環器内科	16,331	45	7.3
消化器内科	24,646	67	9.5
腎臓・内分泌・代謝内科	10,091	28	10.3
神経内科	12,782	35	16.4
血液内科	16,506	45	32.3
リウマチ・膠原病内科	9,103	25	29.7
一般・消化器外科	41,299	113	15.5
呼吸器外科	5,988	16	7.4
心臓血管外科	9,566	26	17.8
脳神経外科	10,586	29	20.6
小児外科	3,028	8	8.2
整形外科	29,167	80	12.6
リハビリテーション科	2,009	5	25.1
形成外科	4,030	11	7.1
小児科	19,384	53	9.0
産婦人科	24,536	67	7.3
眼科	8,292	23	3.3
皮膚科	5,813	16	12.8
泌尿器科	13,709	37	7.4
耳鼻咽喉科	10,545	29	10.1
精神・神経科	6,400	17	22.1
放射線治療科	0	0	0.0
放射線診断科	0	0	0.0
麻酔科	67	0	3.5
救急科	4,440	12	14.2
歯科・口腔外科	2,831	8	10.2
スポーツ医学総合センター	434	1	4.0
その他	0	0	0.0
合計	309,641	846	11.6

※1日平均・平均在院日数を表示する際に端数を四捨五入しているため、合計などにおいて差異が生じる場合があります。

## 手術件数

(2019年度)

診療科名	件数
内科	661
一般・消化器外科	1,844
呼吸器外科	617
心臓血管外科	394
脳神経外科	383
小児外科	210
整形外科	1,982
形成外科	782
産婦人科	2,154
眼科	3,546
皮膚科	449
泌尿器科	1,118
耳鼻咽喉科	941
精神・神経科	476
麻酔科	27
救急科	249
歯科・口腔外科	442
その他	191
合計	16,466

## 保険手術実績一覧

各手術の区分は、厚生労働省の定める施設基準の分類に基づきます。

### 区分1に分類される手術一覧

該当する手術一覧	件数(例)		
	2017年	2018年	2019年
ア 頭蓋内腫瘍摘出術等	209	211	178
イ 黄斑下手術等	441	520	559
ウ 鼓室形成手術等	144	163	145
エ 肺悪性腫瘍手術等	228	228	272
オ 経皮的カテーテル心筋焼灼術	331	287	288

### 区分2に分類される手術一覧

該当する手術一覧	件数(例)		
	2017年	2018年	2019年
ア 靭帯断裂形成手術等	76	75	85
イ 水頭症手術等	74	50	64
ウ 鼻副鼻腔悪性腫瘍手術等	5	2	11
エ 尿道形成手術等	41	42	48
オ 角膜移植術	89	63	48
カ 肝切除術等	89	130	141
キ 子宮付属器悪性腫瘍手術等	62	77	75

### 区分3に分類される手術一覧

該当する手術一覧	件数(例)		
	2017年	2018年	2019年
ア 上顎骨形成術等	23	28	26
イ 上顎骨悪性腫瘍手術等	17	22	22
ウ バセドウ甲状腺全摘(亜全摘)術(両葉)	0	0	1
エ 母指化手術等	7	4	4
オ 内反足手術等	0	0	1
カ 食道切除再建術等	62	55	55
キ 同種死体腎移植術等	20	8	14

### 区分4に分類される手術一覧

該当する手術一覧	件数(例)		
	2017年	2018年	2019年
胸腔鏡下手術、腹腔鏡下手術	1,380	1,352	1,557

### その他の手術

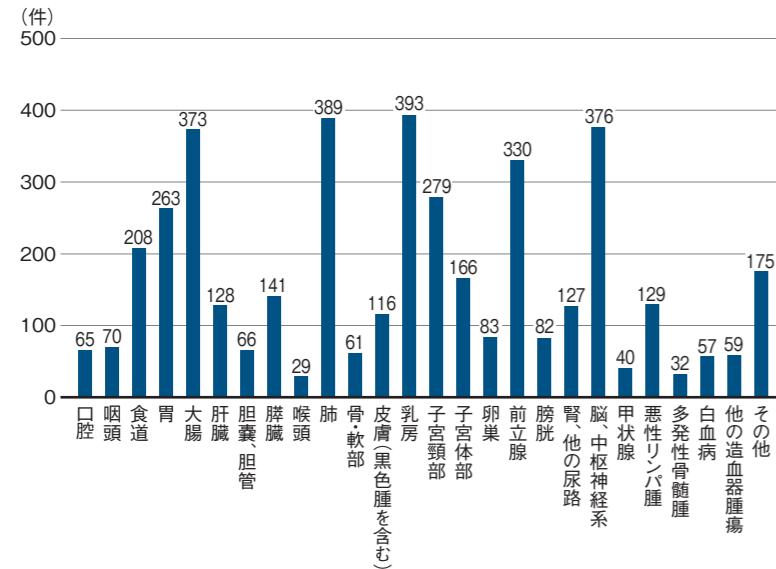
該当する手術一覧	件数(例)		
	2017年	2018年	2019年
5 人工関節置換術	372	403	439
6 乳児外科施設基準対象手術	4	4	5
7 ベースメーカー移植術及びベースメーカー交換術	96	97	81
8 冠動脈、大動脈バイパス移植術(人工心肺を使用しないものを含む。)及び体外循環を要する手術	309	278	239
9 経皮的冠動脈形成術	44	20	15
急性心筋梗塞に対するもの	6	0	1
不安定狭心症に対するもの	6	4	4
その他のもの	32	16	10
経皮的冠動脈粥腫切除術	0	0	0
経皮的冠動脈ステント留置術	287	214	235
急性心筋梗塞に対するもの	20	12	13
不安定狭心症に対するもの	46	31	33
その他のもの	221	171	189



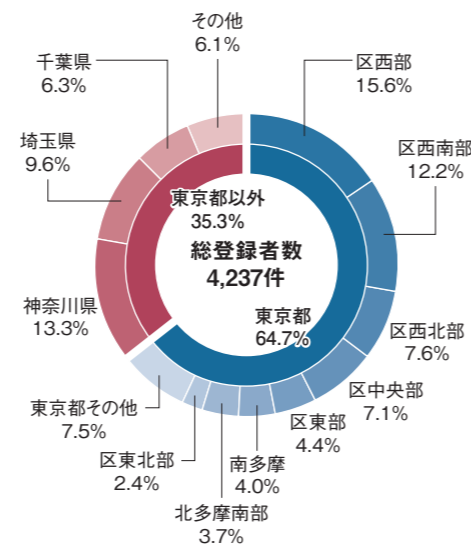
## 院内がん登録件数

(2019年)

### 部位別登録件数



### 地域別がん登録割合



## 薬剤・輸血関連実績

(2019年度)

内訳	件数等
処方せん枚数(枚)	外来: 412,204、入院: 256,387
入院注射薬調製件数(件)	抗がん剤: 14,622、一般注射薬: 85,291
外来注射薬調製件数(件)	抗がん剤: 9,072、抗体製剤: 12,681、一般注射薬: 10,086
薬剤管理指導件数(件)	38,002
輸血用血液製剤使用数(単位)	65,820
輸血検査件数(件)	90,625

## 画像・検体・生理機能検査実績

(2019年度)

内訳	件数
単純撮影(健診含む)	162,093
CT(健診含む)	60,526
MRI(健診含む)	30,027
超音波検査(健診含む)	34,345
核医学 PET+SPECT	11,211
IVR(画像下治療)+血管造影	3,965
検体検査(輸血検査含まず)	9,276,118
生理機能検査	111,103

## 教職員数(人)

(各年度3月1日現在)

内訳	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
臨床系医師(うち研修医)	854(68)	871(61)	843(71)	848(70)	861(67)	863(74)	899(81)
歯科医師(うち研修医)	41(16)	44(16)	45(16)	46(15)	43(14)	42(15)	47(16)
看護師	964	984	999	988	1,015	1,011	994
薬剤師	91	85	94	97	97	103	103
臨床検査技師	124	131	129	144	141	147	147
診療放射線技師	77	78	76	72	79	81	82
管理栄養士	15	21	17	14	10	13	12
栄養士	15	11	8	6	7	-	-
視能訓練士	13	13	15	15	16	17	15
臨床工学技士	21	25	24	26	26	28	27
理学療法士	12	13	13	13	13	13	13
作業療法士	4	4	4	4	4	4	4
言語聴覚士	5	5	5	5	5	6	6
その他技師	60	58	56	51	52	50	57
事務職員	215	217	246	242	240	236	235
技能員	124	113	108	109	105	82	82
職員合計	2,635	2,673	2,682	2,680	2,714	2,696	2,723

## 財務(事業活動収支内訳)

慶應義塾は学校法人会計基準に則って会計処理を行っています。下の表は基準に定められた計算書のうち、当該会計年度の事業活動収入と事業活動支出の内容および収支均衡の状態を明らかにするための事業活動収支計算書の形式で、医学部(信濃町メディアセンターを除く)と大学病院の合計額を表したものです。

また、大学病院の経費は、文部科学省の通知に従い、医療業務に要する経費は、教育研究経費のうち「医療経費」として処理し、その他の経費については、大学における処理と同様に、教育研究経費と管理経費に区分して処理しています。

(2019年度)

(単位:千円)

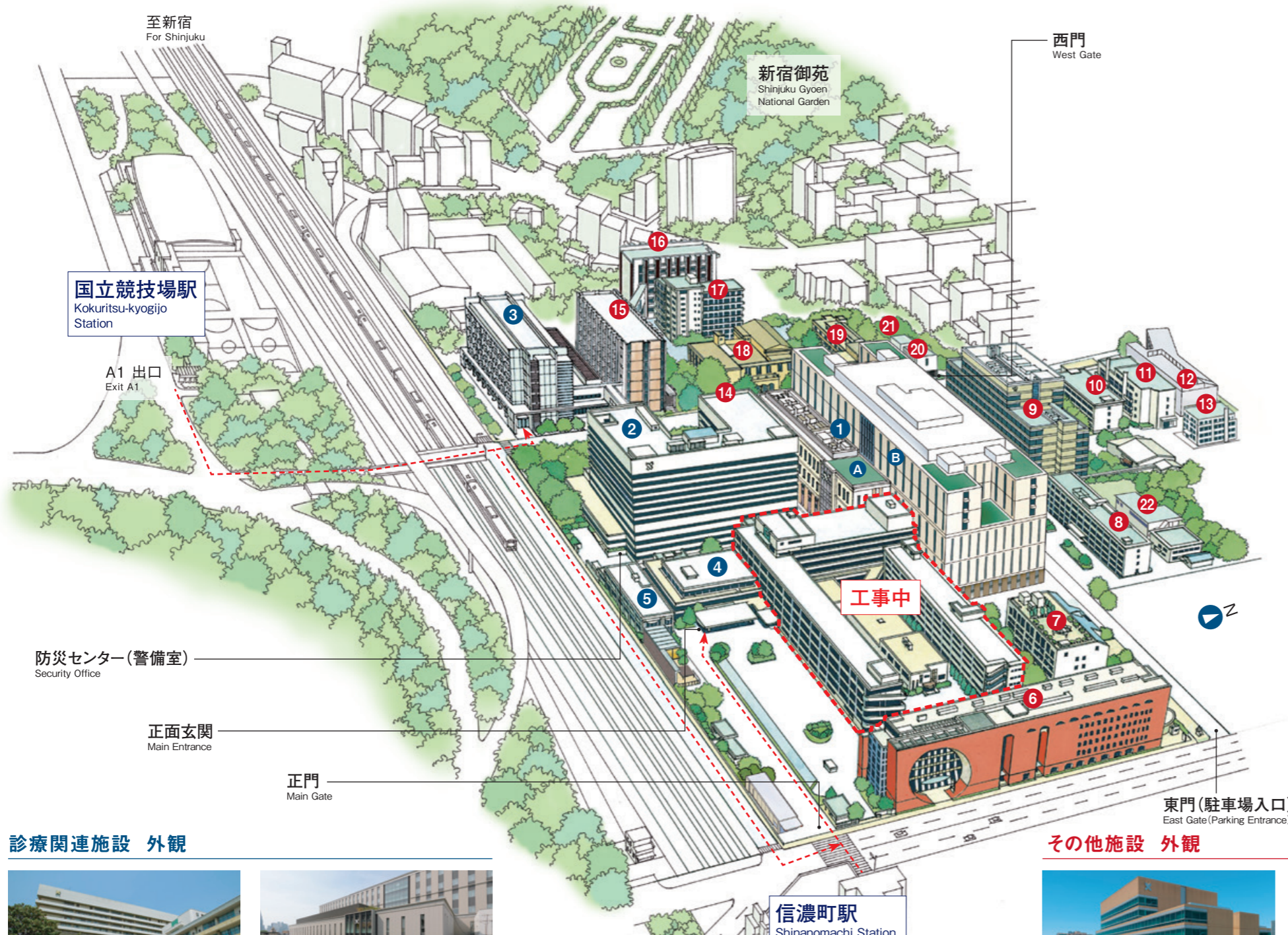
科目	医学部・大学付属病院	慶應義塾全体
<b>教育活動収支</b>		
事業活動収入の部		
学生生徒等納付金	2,944,865	54,340,691
手数料	96,005	2,119,846
寄付金	1,569,710	7,852,151
経常費等補助金	2,705,793	12,686,675
付随事業収入	8,044,282	15,851,938
医療収入	65,312,744	65,312,744
雑収入	2,147,199	4,953,979
教育活動収入計	82,820,597	163,118,023
事業活動支出の部		
人件費	29,632,846	71,044,110
教育研究経費	52,467,539	84,406,961
(内 医療経費)	30,447,691	30,447,691
管理経費	1,010,111	4,538,793
徴収不能額等	45,495	73,088
教育活動支出計	83,155,991	160,062,952
教育活動収支差額	△335,394	3,055,071
<b>教育活動外収支</b>		
事業活動収入の部		
受取利息・配当金	337,308	3,139,807
その他の教育活動外収入	164,169	668,952
教育活動外収入計	501,477	3,808,758
事業活動支出の部		
借入金等利息	0	50,097
その他の教育活動外支出	0	169,216
教育活動外支出計	0	219,313
教育活動外収支差額	501,477	3,589,445
経常収支差額	166,083	6,644,516
<b>特別収支</b>		
事業活動収入の部		
資産売却差額	0	2,646
その他の特別収入	206,317	2,616,115
特別収入計	206,317	2,618,760
事業活動支出の部		
資産処分差額	952	129,126
その他の特別支出	5,410	11,519
特別支出計	6,362	140,644
特別収支差額	199,955	2,478,116
予備費		
基本金組入前当年度収支差額	366,037	9,122,632
基本金組入額合計	△4,234,311	△12,544,875
当年度収支差額	△3,868,273	△3,422,243
前年度繰越収支差額	△29,934,945	△153,981,717
翌年度繰越収支差額	0	△157,403,961
(参考)		0
事業活動収入計	83,528,390	169,545,542
事業活動支出計	83,162,353	160,422,910

※千円単位で表示する際に千円未満を四捨五入しているため、合計などにおいて差異が生じる場合があります。



# 構内図

(2020年10月現在)



## 受診者用施設

- ① 1号館  
Building 1  
A I期棟  
B II期棟
- ② 2号館  
Building 2
- ③ 3号館(南棟)  
Building 3 (South Wing)
- ④ 1号棟  
Wing 1 Wards
- ⑤ レストラン  
Restaurant

## その他施設(医学部・研究関連等)

- ⑥ 信濃町煉瓦館  
Shinanomachi Rengakan
- ⑦ 孝養舎  
Koyosha
- ⑧ 東校舎  
East Lecture Hall
- ⑨ 総合医科学研究棟  
Institute of Integrated Medical Research
- ⑩ 第2校舎  
Second Lecture Hall

- ⑪ 新教育研究棟  
Education and Research Building
- ⑫ JSR・慶應義塾大学 医学化学イノベーションセンター(通称JKiC)  
JSR-Keio University Medical and Chemical Innovation Center
- ⑬ 北別館  
North Annex
- ⑭ 生協購買部  
University Co-op
- ⑮ 3号館(北棟)  
Building 3 (North Wing)
- ⑯ 臨床研究棟  
Clinical Research Building
- ⑰ 紅梅寮  
Koubai-ryo (Dormitory)
- ⑱ 北里記念医学図書館  
Kitasato Memorial Medical Library
- ⑲ 予防医学校舎  
Building for Preventive Medicine & Public Health
- ⑳ 仮設D棟  
Temporary Building D
- ㉑ 仮設E棟  
Temporary Building E
- ㉒ 仮設F棟  
Temporary Building F

## 診療関連施設 外観



## その他施設 外観





当院では、ご紹介くださる患者さんの待ち時間を短縮するため、予約制を導入しています。以下のお手続きにご協力をお願いいたします。



電話の場合



WEBの場合



FAXの場合

受付時間 午前8時30分～午後7時00分(平日、第2・4・5土曜日)※土曜日は午後5時00分まで

①予約の申込

「外来予約窓口」にお電話ください。  
03-3353-1257

「申込フォーム」をご利用ください。  
<http://www.hosp.keio.ac.jp/iryu/syokai.html>  
Webサイト「患者さんの紹介について」から初診外来予約フォームに必要事項を入力してください。

「予約申込書」「診療情報提供書(紹介状)」をFAXで送信ください。  
03-5843-6167  
「予約申込書」は当院Webサイト(左記URL)からダウンロードできます。

②予約内容を回答します。(予約時間は当院で指定させていただきます)

「予約票」「FAX送付状(紹介状返信用)」を送付いたします。(15～20分程度かかります)

「予約票」をFAXで送付いたします。(15～20分程度かかります)

午後7時00分以降に送信いただいた申込は翌日回答となります。  
※土曜日は午後5時00分まで。休診前日の受付時間外申込への回答は翌診療日となります。

③診療情報提供書(紹介状)をFAXで送信ください。

03-5843-6167

(送付したFAX送付状をご利用ください)

④患者さんに「予約票」をお渡しください。

【患者さんがご予約当日お持ちいただくもの】

- 予約票
- 保険証や医療証
- 当院の診察券(お持ちの方)
- 画像(CD-Rやフィルム)、検査データ
- 診療情報提供書(紹介状)の原本(必ず事前に送信願います)
- お薬手帳(お持ちの方)

ご不明な点は「外来予約窓口:03-3353-1257」までお問い合わせください。

■ 休診日: 日曜日 / 第1・3土曜日 / 国民の祝日・休日 / 年末年始(12月30日～1月4日) / 慶應義塾の休日(1月10日)

慶應義塾大学病院に受診をご希望の患者さんは、以下の手順でご予約をお願いいたします。

1. 外来予約窓口にお電話をお願いいたします。

外来予約窓口: 03-3353-1257

受付時間: 午前8時30分～午後4時00分  
(休診日を除く)

休診日: 日曜、祝日、第1・3土曜日、  
年末年始(12月30日～1月4日)、  
慶應義塾の休日(1月10日)

お電話でお伺いすること

- 他院からの紹介状(診療情報提供書)や検査結果・画像等をお持ちかどうか
  - 診察を希望される「診療科」「医師」「日時」
  - お名前、生年月日、当院の受診歴など
- ご予約の日時をご相談して決定します。

2. 紹介状や保険証のコピーをお送りください。

送付先: 〒160-8582

東京都新宿区信濃町35番地  
慶應義塾大学病院  
外来予約窓口

※個人情報につき「簡易書留」で送付をお願いします。

※予約日の2日前までに必着をお願いします。

※診察日まで期間が短い場合は、直接病院にお持ちいただくか当日ご持参ください。

3. 受診当日、以下のものをお持ちください。

- 予約票
- 保険証や医療証
- 当院診察券(お持ちの方)
- 画像(CD-Rやフィルム)、検査データ
- 診療情報提供書(紹介状原本)
- お薬手帳(お持ちの方)

【ご来院時間】

予約時にご確認いただいた時間にご来院ください。

【ご来院場所】

病院1階 1Nにお越しください。

ご不明な点は「外来予約窓口:03-3353-1257」までお問い合わせください。

予防医療センター 人間ドックのご案内

予防医療センターでは、「健康寿命の延伸」を目指して、人間ドック(自費診療)を実施しています。

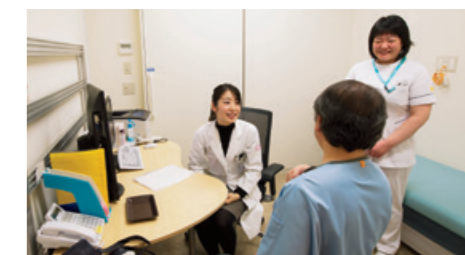
予防医療センターの特徴

1. 質の高い検査を実施
  - 大学病院で経験を積んだスタッフによる精度の高い検査を行います。
2. 大学病院ならではの医療連携
  - 検査結果データはカルテに残り、必要に応じてその後の診察等に活かされます。
  - より専門的な検査が必要な場合、慶應義塾大学病院の診療科や他医療機関への紹介を行います。
3. 適切なフォローアップで健康維持をサポート
  - 受診結果に関するフォローアップは、医療コーディネーター(看護師)が窓口となり、必要な検査や診療科受診のサポートを行います。

お一人おひとりに最適な健診プログラムのご提案ができるよう、多彩なメニューをご用意しております。健診プログラムの内容、選び方など詳しい情報は、予防医療センターのWebサイトをご参照ください。なお、Webサイトがご覧いただけない際は、パンフレットをお送りいたします。お気軽にお電話でお問い合わせください。

URL: <http://cpm.hosp.keio.ac.jp/>

お問い合わせ: 03-6910-3533 / 受付時間: 月曜日～金曜日、第2・4・5土曜日 午前8時30分～午後5時00分



予防医療センター Webサイトはこちらから

